

# 中世曹洞宗切紙の分類試論(二)

—竜泰寺所蔵『仏家一大事夜話』について—

石川力山

## 一はじめに

中世曹洞宗における禅籍抄物資料、いわゆる洞門抄物資料の研究の一環としての切紙資料の有する意義については、先の稿においてすでに論じた。<sup>(1)</sup>また、切紙資料の種類に関しても、同稿において、各種の目録類を引用しながら、近世江戸期までのものも含めた意味での、切紙資料の持つ機能および種類、適用範囲についてあわせ提示した。

切紙資料が他の抄物資料の持つ意味と大いに異なる点は、特に中世曹洞宗教団展開の歴史を考える際、他の抄物資料が宗旨の参究や門派の動向を反映した、言わば教団の表層部に限定された問題に関する史料であるのに対し、切紙は、教団の地方展開の問題に直接関わり、いわば教団の基層部において具体的に機能した史料も含まれるということにあり、その存在の意義、および研究の意味もこの点に集約される。

本稿は、こうした教団史研究の上で貴重な切紙資料が、従来本格的研究がなされないまま放置されて来たことを鑑み、

また、この切紙資料の性格が極めて雑多なものを含むものであり、さらにつてその形態上、極めて散逸し易い性質のものであつた点などを考慮して、中世切紙の分類と、原資料の集成とを意図したものである。また、その範囲を中世末乃至近世初期までに限定したのは、まずその第一の理由は、中世教団史思想史を考察する上での切紙資料の持つ意味を確立したいためであり、広くいえば、あくまでも洞門抄物資料研究の一環であるという点にある。第二の理由は、江戸期にはいると、切紙資料も集成の傾向が著るしくなり、また、従来の一件につき一枚という切紙本来の形態から、冊子の形に蒐集編成される場合も多くなり、その全体像も容易に窺うことができるようになるということによる。第三の理由は、江戸期にはいり、切紙の種類も三百数十種あるいは四百余種といわれる

ようには、時代が下るにしたがつてその数量は厖大なものになるが、中世の段階ではどの程度の数量、内容があつたのかと、中世切紙資料の種類と機能の実態を解明しようとする点にある。

ところで、今回取り上げた岐阜県龍泰寺所蔵の『仏家一大事夜話<sup>(3)</sup>』は、形態や書体上からみても、中世末、近世初頭を下らない書写本であると判断され、中世切紙の集成された例としては極めて異例のものであり、管見に入つたものの中では、希有な中世切紙集成といって過言ではない、貴重な写本である。その内容目録については先の稿でも紹介したが、本稿において全文を翻刻し、中世切紙の実態を解明する一資料として、若干の資料的位置付け、乃至内容の一端に触れてみたい。

## 二 書冊形式について

ここに紹介する『仏家一大事夜話』を所蔵する岐阜県関市竜泰寺は、大雄山最乗寺の末寺で、開山は、大雄山開祖了庵慧明（一三三七～一四一）の法嗣無極慧徹（一三五〇～一四三〇）、末寺に栃木県大中寺、長野県大沢寺、群馬県茂林寺等五十四箇寺、門葉五百七十余箇寺（転宗、廢寺等も含む）を擁した、了庵派下無極派の大本寺である。<sup>(4)</sup>

『仏家一大事夜話』は、この竜泰寺の古蔵を解体した際、元

書写の『龍泰寺行事次序』、その他、『清規古記録』『人天眼目抄』『補陀寺本參為末世記処』等の、年記は見当らないが明らかに中世末期、あるいは近世であつても極めて初期の頃のものと判断される一群の史料類と一緒に発見されたもので、その書体及び紙質等は、『大陽明安大師十八般妙語』や『清規古規録』に近似している。いつの頃か裏打補修されており、その折に表紙もつけられたもので、「龍泰寺常什具」及び「仏家一大事夜話」の表題が打つ附けに墨書きされている。次にその書冊形式を示しておく。

### 冊数 一冊

料 紙 楷紙

大きさ 縦23・6cm 横19・5cm (含補修裏打紙、  
縦28・4cm 横20・5cm)

装 鈕 袋綴

丁 数 本文17丁、表紙裏表紙（別紙）各1丁

標 題 外題「仏家一大事夜話」内題「仏家之大事」

行字数 每半葉14行 一行24～35字

刊 写 写本

書写年 不明（中世末か）

筆者 不明

墨書等（表紙）「龍泰寺常什具」ノ墨書アリ

（末尾）「當門徒秘参へ」ノ識語アリ

本書の内容項目については、先の稿にも掲げたが、遗漏が数ヶ所あったので、改めてここに、筆者の試論である十一種の分類項目によつて掲げてみる。（括弧内の番号は、翻刻資料の通し番号である。項目名は原文に即しつつ、適宜語を補い内容理解に便ならしめた。）

### 1 繁林行事（十二種）

- (1) 勤行（三時ノ行事）
- (2) 観音経ノ読誦
- (3) 日中祈禱
- (4) 日ノ晩ル、行事（放散）
- (5) 四時ノ坐禅
- (6) 御影堂前ノ法花經読誦
- (7) 祝聖之参
- (8) 鐘鼓之参
- (9) 尊客ノ時、勤行止ムル心
- (10) 小開静ノ参
- (11) 大開静（ノ参）

2 行履物（十九種）  
(17) 土地堂団子供羊

鉢

鉢ノ参

柱杖之参

払子之参

楊枝ノ参

翻袖参

手巾参

襪子参

履ノ参

複子参

傘参

草鞋ノ参

襪子参

龍天参

龍天参

頂相参

香炉ノ参

坐具参

竜天参

竜天参

### 3 堂塔・伽藍（一種）

(7) 祖師堂ノ参

4 仏・菩薩(二種)

(9) 諸堂ノ本尊ノ普賢

十三仏参

(1) 第一不動

(2) 第二釈迦

(3) 第三文殊ノ境界

(4) 第四普賢ノ境界

(5) 第五地藏

(6) 第六弥勒ノ境界

(7) 第七藥師ノ本体

(8) 第八觀音ノ全体

(9) 第九勢至ノ本体

(10) 第十阿彌陀ノ本体

(11) 第十一阿閦仏ノ心

(12) 第十二大日ノ全身

(13) 第十三虛空藏

5 追善・葬送供養(四種)

冥供参

亦冥供ムケ羊

(50) 隔国吊亡冥参  
塔婆参

6 室内(嗣法・血脉)(二種)

(18) 血脈参

(40) 掛絵参

7 参詫(宗旨・公案・口訣)(八種)

(19) 命脈ノ参

(20) 経教参

(21) 卍日版り(參)

(22) 五大六蘊参

(23) 四大五蘊

(24) 没后作僧参

(25) 宗旨鴛鴦参

(26) 宗門船参

8 儀礼(授戒・点眼・臨時行事)(九種)

(11) 小施餓鬼之参

(12) 一返消災(咒)

(13) 鬚髮参

(14) 安坐点眼

(15) 中陰破壇参

(16) 塔婆書テ后点眼参

(17) 念誦参

(18) 持戒参

(19) 念誦参

## 9 祈禱・呪術（一種）

(63) 理趣分參

## 10 神仏習合（四種）

(6) 土地神

(43) 廿一社巡礼參

59 鎮守之參

(60) 白山ノ參

## 11 吉凶・ト占（二種）

(47) 吉方勧請參

(48) 悪日連續參

『仏家一大事夜話』全体を通しての性格は、まず第一に、体裁の上からいえば、内容の展開が師と弟子、あるいは師と学人の問答体によってなされていることである。つまり、形態の上から見るなら、この六十四項目はすべて「門参」とみるとができるのである。筆者は龍泰寺所蔵の門参類の紹介を行った際、この『仏家一大事夜話』も門参の一種として取り扱つたことがあり<sup>(6)</sup>、国語学の立場からも同様の扱いがなされている。<sup>(7)</sup>末尾の奥書にも「当門徒秘參也」とあることも、それを示している。

ところで、筆者はかつて、中世曹洞宗切紙の発生過程、特に「参話」のそれについて、中世の禅籍提唱の伝統の上に立つ過程と、洞済を問わず盛行した公案禪の風潮を前提とした

過程の二通りを想定し、



という図式を仮定してみたことがある。<sup>(8)</sup>しかし、この『仏家一大事夜話』の場合は、門参から発展したと見られるものは、必ずしも参話だけには限らないことになる。内容項目としては明らかに切紙であるが、叢林行事や儀礼に関する各項もすべて門参的に取り扱われるのである。もちろん、この書が一篇にまとめられる際に、全体的な統一の上からこうした形態をとつたとも考えられるが、襪子参・竜天参・鉢参等の項目が重複して出てくることなどを考慮するなら、それほど全体的な統一や文体上の統一に意を用いたとも思われず、やはりこうした門参的伝統の上に切紙も成立したという成立過程も指定しておかなければならぬと思われる。駒沢大学図書館所蔵の寛永十年（一六三三）九月書写の『室中切紙』にも、例えば、

### 住持燒香切紙

●燒香次一边消災咒者仏法皇永扇之祈也、師云、仏法王法ヲ、答云、卒度モ油断ハ走ヌ、師云、仏法王法相離レヌ処、答云、仏法ガ王法デ走、師云、桃ヶ義、云、暫時モ油断ハ走ヌ、師云、夫レワ那箇ノ一処タゾ、云、見自己、如ニ冤家、師云、何ンデ冤家トワ云タゾ、云、暫時モ油断サセマイ為デ走、心ハ、纔

モ油断シ悟リ智解意識ガ出レバ心王城カ乱ル、ゾ、油断セヌ時  
冤ハ無キ也。(12オーワ)

とあり、また「取名之考」として、

○次取名之参、師云、名之付様、学云、名隨喚応走、師云、  
元来無名、何ニト名タ、学云、道心ト付ケウモ道満ト付フモ  
儘デ走、師云、其証拠、学云、形興ニ未質ハ、名起ニ未名ハ、心ハ、  
元來無名、處ヨリ釈迦現シ、達磨現ジ、綠リ紅ト成テ出タゾ、サ  
テマタ法眼從ニ無住本ニ立ニ一切法、如何是住本ト問エバ、形興  
一名ト答話タゾ、敲レ門処々在人膺ト云モ此意子也。(16オーワ)  
とあるように、師と学人との間における問答形式で進められ  
る門参形式の切紙の存在が確認できる。ただし、後者の切紙  
の前には、「涅槃入棺取骨之切紙也」として、「入滅ノ時」  
「御影之事」「荼毘鐘」「会撞更」「入滅之時之牌之更」「取骨  
安骨之時之鼓与鉢同時声」の五種の切紙を引用しているが、  
最後に「祥雲山龍泰寺花叟以来代々如レ此」と付記されてお  
り、この後に書写される参話形式の「取名之参」もあるいは、  
龍泰寺系統の伝統を物語るものかもしれない。『室中切紙』  
は、通幻寂靈—了菴慧明—無極慧徹—月江正文—華叟正萼—  
快庵妙慶—培芝正悦—圭庵伊白—龍州文海—海菴尖智—無学  
宗勢—盛菴全昌—心外—直洲—心嶺—思朔—呑盛と次第し  
た、龍泰寺派下大中寺系の果泰寺に伝承された切紙の集成で  
あり、門参資料の伝承を最も多く存する了庵派の伝承資料で  
あることとも符節を合する。

全体を通貫しての第二の性格は、右に述べたこととも関連  
するが、叢林行事や儀礼の諸項目についても、具体的な儀軌  
を規定するものは殆んどなく、それらについての宗旨の上か  
らの領解把握の仕方、あるいはその意味内容の拈提に終止し  
ているということである。つまり、項目名としては十一種に  
分類可能な、まさしく切紙資料として扱つてよいものである  
が、内容的にいえば、いずれも「参話」として一括してよい  
ということである。たとえば、(4)没后作僧参は、死者に戒を  
授けて僧となし成仏せしめようとする、いはば今日の葬儀法  
の先駆をなすものと見てよいが、通常の切紙の場合は、例え  
ば永光寺所蔵の元和二年(一六一六)書写の場合は、

#### 没後授戒作法

先対ニ亡靈按ニ椅子、中央卓ニ棹子一脚ニ掛裳衣、香炉灯燭花瓶  
立ニ造華、灑水器入ニ淨水置ニ灯燭香炉間ニ次導師与ニ教授師ニ同  
時入道場、先導師燒香、沈水香等、次与ニ教授師ニ相並向ニ椅  
子前ニ同時三拜、次導師就ニ椅子、教授師立ニ椅子左邊、次導師  
時入道場、先灑ニ師頂上、次灑ニ四方次亡靈亦師頂ニ収ニ水器、  
取ニ灑水器、先灑ニ師頂上、次灑ニ四方次亡靈亦師頂ニ収ニ水器、  
次合掌、導師教授師同音偈唱ニ匿音、偈云、但以ニ衆法、合ニ成此  
身ハ此身起時唯法起、此身滅時唯滅法、此法起時不レ言ニ我  
起ニ此法滅時不レ言ニ我滅、前念後念念念不ニ相對、前法後法法  
法不ニ相對、三辺、次導師拈ニ座具袈裟鉢盂等、教授師代ニ亡靈ニ頂ニ  
戴、一一、授持亡靈令ニ頂戴、次亡靈令ニ著衣威儀、次導師説レ戒、  
説了師教授師同時三拜、次導師示ニ亡靈新僧ニ云、上不レ修ニ正

戒相、一下不レ取ニ邪念心、是云、清淨大戒、亦云、渠元來清淨不汚染、

開山仏慈禪師以來代々如此

開山御在判 洞谷永光現住春長（花押）

千時元和式丙辰載孟春吉日

とあるように、導師と教授師によつて行われる亡靈授戒作僧

の儀式は、その進退や用いる香までも極めて詳細に記され、また亡靈（新僧）についても、あたかも現前に在るが如くに扱われる有様が髣髴される。三重県広泰寺に所蔵される永禄十一年（一五六七）六月一日書写の「没後授戒之作法」切紙も、

先対亡靈按椅子於中央有棹子一脚、掌裳衣、兼掛之、香炉明燭立造花瓶灑水器入淨水香炉明燭之間置之、次導師教授師同時入導師道場、先燒香沈香纖香等也、次教授師立椅子左辺、次導師合掌唱教授師同音唱之、所謂送音之偈是也、但以衆生法々合成此身、々々起時不言我起、此法滅時不言我滅、靈前拈袈裟鉢盂、教授師代亡靈戴之、次亡靈合威儀、次導師終向椅子礼拝出、上不修正戒相下不取邪念心、洞家嫡々相承之時專這為大夏伝授者也、

永徳七年癸亥能州總持紹瑾伝授之

永禄十年卯六月朔日授舜桂（花押）

金龍山海眼院住持融心叟（黒印）（黒印）

附与英和畢

るが、内容は全く同一といつてよい儀礼が展開される。ところが『仏家一大事夜話』の44没後作僧参では、

没後ニ僧ト作シ羊ヲ、云、イヤトモ応トモ云イ走ヌ、着語ヲ、

無我相無人相説破セヨ、云、徹底無相ノ時、何トモ成テ走、師

云、夫レガ何ニトテ僧ト作羊デハアルゾ、云、イヤ共ウムトモ

云ワヌガ真ノ出家、師云、句ヲ、云、聖凡自知、

とあるように、儀礼の方途については全く触れず、もはや否とも応とももの言はぬ死人亡靈に戒を授け僧となす意味を開し、その無相のあり方、否とも応ともいわない無分別のあり方こそ真の出家の姿であるというより出家の第一義諦へと話題を敷衍させる。右に引用した永光寺や広泰寺所蔵の

「没後授戒之作法」の切紙は、具体的な儀礼執行の手引所であるが、『仏家一大事夜話』の「没後作僧参」は、むしろその

儀礼を執行する導師や教授師の側における、宗旨の上からみてその儀礼が妥当性を持つものか否かについての訣着を明示したものということができる。したがつて、また逆に言えば、この參の背景には「没後授戒之作法」の儀礼が前提としてあるということにもなる。この外にも(1)小施餓鬼之參、(38)

灵供參、(39)亦灵供ムケ羊、(40)隔國吊灵參、等についてもほぼ同様のことといえる。もちろん、『仏家一大事夜話』が全く儀礼的側面を捨象しているわけではなく、たとえば、(41)中陰破壇參では「地ヲ丁ト打テ、フット吹ク也」とその行い方を

具体的に示したり、(3)安坐点眼では、「点眼ノ時、新キ筆墨硯ヲ調テ、師像ノ前立倚テ筆ニ墨ヲ染テ、左ノ眼ニ点ノ唱テ云、威勢与レ愛想、慈眼視衆生、福聚海無量、亦別ノ筆ニ染テ、眉間ニ指アテ」、即右眼ニ点メ云、一点水量両処化レ竜」とあり、今日行われている開眼供養と全く同様の儀礼が示されている。しかし、いずれの場合も、これが執行される理由、意味が師資の問答という門参の形で訣着がつけられるというのが『仏家一大事夜話』の持つ基本的性格の一つであり、全体がすべて参話の形を持つてゐるということになる。

### 三 分類項目の問題

すでに示したように、六十四種からなる『仏家一大事夜話』の内容を十一種に分類したが、これについても種々に問題が提起できる。まず第一に、重複項目の問題であるが、2行履物の中の襪子に関する参には、(3)襪子参、(4)襪子参の二種類があるが、前者は、

襪子参、師云、襪子ノ踏ミ羊ヲ、云、何タル仏像ヲ踏ミ尊容ヲ踏シテモ咎ハ走ヌ、師云、夫ハ何トテ、云、踏シタトモ踏マヌトモ全ク知リ走ヌ、師云、八字ニ立タル心ヲ、云、八方通達テ走、師云、左ヨリハイテ右ヨリ脱イダル心ヲ、云、作一円相、師云、ソノ心ヲ、左右逢レ源前ニモ在ヘ、

とあり、襪子の機能と用い方が問答される。後者ではさら

に、これが詳説されるが、特に問題となるのは、

道元和尚帰朝ノ時、従<sup>二</sup>明州津<sup>一</sup>坂<sup>三</sup>天童山<sup>二</sup>、廿日留リテ参得アル間、襪子参トモ、廿日皈リノ参トモ云く、

とある記述で、道元(一一〇〇~一二五三)が天童山の如淨に参じ帰朝しようとした際、明州より一旦天童山に帰つて二十間留まり、この間に如淨との間で襪子に関する問答商量がなされ、道元はこれを参得したというのである。さらにこの話題は、(2)廿日皈り参に、

途中ヨリ廿日皈リ時、道元如何是襪子ト問エバ、天童淨云、左ト御答話有タ処テ、元大悟タソ呈ニ、大悟ノ機ヲ、云、左<sup>レ</sup>右逢<sup>レ</sup>源、

と全く同趣の参話として取り上げられるが、ここで注目されるのは、道元の大悟の機縁がこの襪子に関する如淨との問答であったということである。

道元の投機の因縁については、「身心脱落」「脱落身心」の両語によつて如淨の印可を受けたという通説は、『伝光錄』『三祖行業記』『碧山日録』『建撕記』『如淨禪師統語錄跋文』等に伝えられ一般に知られ支持されているところであるが、実はこれ以外にも、六祖慧能の「頂門眼照破四天下、云々」の語によるものであるという伝承もある。「頂門眼切紙」がそれである。<sup>(9)</sup>また一般には殆んど知られていないが、道元の<sup>(10)</sup>投機の頗なるものも伝えられており、この種の伝承が決して

確定したものではなかったことが知られるが、襪子に関する如淨との問答が道元の大悟の機縁であったとする伝承も、歴史的事実は別としても、極めて興味ある伝承といえる。大悟の機縁を重視した中世公案禪の世界の中で、宗祖の大悟の機縁をその門派がいかに見ていたかは、その派の安心訣着の問題とも関わりを持つからである。

襪子参の外に重複が目立つ切紙に、竜天参があり、(42)(52)(61)の三種存する。この三種のうち、(52)の竜天参は、

竜天参、師云、竜天トハ何ニ<sup>タ</sup>崇<sup>タ</sup>ソ、云、卦テ走、師云、ドノ  
卦ソ、南方離ノ卦テ走、離ノ卦トハ何ニ<sup>タ</sup>云タソ、此心テ走、  
心トハ何ニ<sup>タ</sup>云タソ、本ナイ物テ走、真梁御唱<sup>ヘ</sup>、

とあるように、通幻派の中の石屋真梁（一三四五～一四二三）の系統の門参が引用されたもので、他派の門参をそのまま参考として用いられたものであろう。また(61)の竜天参は、(60)白山参に続くもので、周知のように竜天護法善神は白山妙理大権現とともに、軸にして所持し、雲水の修行無難、道念増進を祈念する行履物であるが、ここではその守護神としての意味を追求したものである。したがって、了庵派における行履物としての竜天参は~~ゆ~~だけであるといえる。

これらの外に、(38)(39)の灵供参、(51)(62)の念誦参等に重複が見られるが、いずれも著しい扱い方の相違は見られず、編集段階における未整理の痕跡を示すものとみてよいであろう。

また、分類作業上の問題としては、すでに見た竜天参や白山参を行履物に収めるか神仏習合に収めるかは問題の残る所であるが、特に問題になるのは、先に見た(44)没后作僧参である。本稿では、内容には全く儀礼的側面は見出せず、したがって参話の部に収録したが、その前提にはやはりあくまでも儀礼としての「没後授戒作法」があり、儀礼の部に収録すべきであるとする立場も首肯し得る。一方、没後の授戒とは、実態は死者に対する葬送儀礼そのものであり、その意味からは、追善・葬送供養の部に収録することも可能である。

この没后作僧参の外にも、やはり追善・葬送供養の部に収録した(54)持戒参も、具体的には死者授戒の問題であり、没后作僧参と同様に参話もしくは追善・葬送供養の部に収録することも可能であることは前述の通りである。

このように、本稿における十一種の分類項目は、切紙の全體像を考えた場合、項目立そのものに問題が残っているといつてよく、今後の課題もあるが、『仏家一大事夜話』に限つていえば、その内容そのものがすでに特殊な成立史を有するものであるということも考慮しておく必要があろう。しかし、先の稿においても示したように、この十一種の分類項目は、他の集成物の切紙分類にも殆んど適用可能であったことから、今後もさほどの支障のない限りこの分類項目を適用し

て行く予定である。また、他の切紙集成の分類にも適用できるという事実は、逆にいえば、『仏家一大事夜話』そのものが、各種の切紙を網羅的に集成していることの証左でもあり得る。

#### 四 伝承経路について

『仏家一大事夜話』が竜泰寺所伝の切紙類を基礎として、各派所伝の門参類を参考に全体を参詣風に整理したものであることは疑いない所である。他派の門参とは、<sup>(30)</sup>四大五蘊（參）には「是ハ石屋与レ竹居師弟上參也」とあり、<sup>(31)</sup>安坐点眼にも「以上挙着十八位へ、屋与居之秘參へ、可秘へ」とあり、さらに<sup>(32)</sup>龍天參には「真梁御唱へへ」あるいは<sup>(33)</sup>坐具参には、「此參ハ石屋門戸モ了庵門戸モ不レ差ナリ」等とあることから、山口大寧寺・慶児島福昌寺を中心に四国九州地方に展開した、通幻派下石屋真梁・竹居正猷系統の門参のことであり、これが圧例的に多く引用されていることが知られる。また、石屋門戸と了庵門戸という対照が示しているように、その所伝は了庵派、無極慧徹・華叟正壽の一流に相伝したものと見てよいであろう。<sup>(11)</sup> 石屋派以外の引用としては、<sup>(33)</sup> 理趣分參の割注に、「信岩派ニ在ル」へとあり、太源派大洞院派下の真岩派の門参も参考にしていると見られるが、具体な引用例は他には見出せない。

このほか、末尾の「当門徒秘參へ」という奥書の「当門徒」も、無極・華叟の門徒と解してよいと思われるが、この奥書は『仏家一大事夜話』全体の奥書と見るべきではなく、<sup>(64)</sup>十三仏參のみの奥書と見るべきであろう。それは、(イ)第一不動の「以上九位へ」、(ロ)第二釈迦の「以上八位」、(ハ)第三文殊の「七位へ」、(ニ)第四普賢の「以上七位」、(ホ)第五地藏の「九位へ」、(ヘ)第六弥勒の「以上七位へ」、(ト)第七薬師の「八位へ」、(チ)第八觀音の「以上八位へ」、(ヌ)第十阿弥陀の「以上九位」等の各末尾の記載に対応するもので、それぞれの問答が、拶語（師云）七問、代語（代）七答、八問八答、九問九答、十八問十八答という形で展開されているという意味である。しかし、この<sup>(64)</sup>十三仏參だけは他派の門参を参考していがない独自の參という意味で「当門徒秘參へ」という奥書が附されたものと思われ、当門徒とは本文の言葉でいえば「了庵門戸」ということになる。

ここで、了庵以下、無極・華叟系統の所伝の切紙集成として注目したいものが、先に引用した竜泰寺末柄木県大中寺の系統に伝承され、寛永十年九月書写の『室中切紙』であり、その中に、永正十二年（一五二五）に集成されたとみられる切紙目録が引用されている。それは、

・梅絹二切、・国王授戒作法一枚紙也、  
・菩薩戒作法長統之紙也、

・受業命時椅子作法一枚紙也、・戒律伝授作法一枚紙也、・自家訓訣・龍天授戒作法一枚紙也、・栄西記文一枚紙也、・達磨一心戒作法一枚紙也、・応量器 梅絹一尺四方一切以一枚也、・没後授戒作法一枚也、<sup>上嗣書内數十六様</sup>・仏祖正法眼藏血脉一枚也、・臨濟下血脉一枚也、<sup>無極授三月江記文長統紙也</sup>・嗣法論作法一枚紙也、<sup>印形</sup>一枚也、空塵書三枚統紙也、<sup>永平仏祖正伝受經儀軌一枚也</sup>・曹洞合血本則一枚紙也、<sup>三光普所大冥肝要句儀一枚也</sup>・普門品相承之次弟一枚紙也、<sup>嗣書卷一冊</sup>并月両箇一枚也、<sup>如淨老師授道元和尚儀軌</sup>一枚紙也、<sup>夜參廿八透一冊</sup>此内一透ハ秘極ノ々也、<sup>梅絹嗣書卷一冊</sup>・十八般抄共二、一枚、<sup>統物卅一樣</sup>本一枚、<sup>小參之秘訣一冊</sup>一枚、<sup>夜參出標榜天如節田相承次弟朝參計謹共</sup>宗門一大事因縁禅相伝附既畢、

永正十三歳丙子極月十三日夜半

宗門一大事不遺一物正忠伝既畢、

天文二季癸巳十月廿七日夜半於最乗金剛寿院宗門一大事不遺一物宗長伝附既畢、此外伝後之參敲換十六則最秘極也、若流布他見輩者瞎却正法眼編却命者也、

日本天文廿年辛亥 今寛永十歳癸酉九月吉日

(9ウ～11オ)

というものである。『室中切紙』の内容については、『仏家一大事夜話』と同様の門参形式の切紙も含まれることはすでに指摘したところであるが、詳細には稿を改めて論ずるつもりである。

この『室中切紙』に引用された永正十三年の切紙目録は、中世切紙の集成目録として極めて貴重な意味を有する。それは、『仏家一大事夜話』は、明らかに中世末乃至近世の極初期の頃までの成立であることは疑いないが、遺憾ながら書写の年時を欠き、また伝承経路も推定の域を出ない。また、内容的にも、全体が参詫形式で統一されており、儀軌の指南書というよりは、宗旨の拈提書といった性格が強いという、特殊な成立過程と内容を有する史料であるが、『室中切紙』の三十一種からなる切紙目録は、その種類こそ多くはないが、参詫的なものはもちろん、室内や各種儀軌等のものを網羅した中世切紙そのものといった観がある。国王授戒作法、自家訓訣、龍天授戒作法、栄西記文、達磨一心戒作法、没後授戒作法、空塵書、月両箇、十八般（大陽明安大師十八般妙語）等は、中世書写成立の原史料が比較的多く発見されている切紙である。この目録中の、自家訓訣、普門品相承、栄相僧正記文等は、その本文も収録されており、切紙史料そのものとしての価値も重要である。

次に『室中切紙』の目録と『仏家一大事夜話』に掲げられた項目を比較してみると、その著しい差異がまず目につく。この目録を先の分類項目にしたがつて分類してみると、6室内的関係が八種、7参詫の類が十二種、8儀礼の関係が十種と、この三種で殆んどを占めてしまう。特に多いのは授

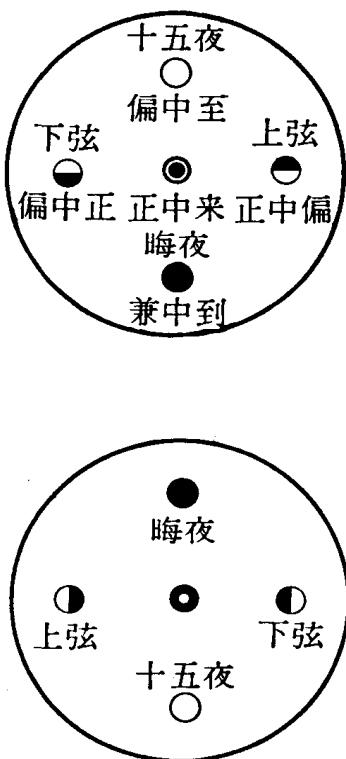
戒関係の切紙である。また、参詣関係の中、夜参廿八透、続物廿一樣、小参之秘訣一冊の三種は、所謂門參資料そのものであり、これを一点毎に分類したら参詣の数量はさらに増加することになる。この目録の項目が『仏家一大事夜話』の項目と重複するのは、応量器(鉢)、没後授戒作法(没后作僧参)ぐらいのもので、殆んど内容的には共通性を存しない。

ただし、『室中切紙』目録では、「月両箇」の切紙を取り上げているが、これについては若干の考察を加えておく必要がある。月両箇とは、『峨山和尚行実』に、

瑾一夕齋月次、師侍<sup>レ</sup>座、瑾忽問云、爾知<sup>ニ</sup>月有<sup>ニ</sup>兩箇乎、師曰、不是、瑾曰、不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>月両箇者、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>洞上種草、云云、

(『曹全』史伝下、二六三頁)

とあるのに基づく公案で、無極慧徹が了庵慧明の会下で、この公案により開悟して以来、門参としても、また切紙としても、無極派下に伝統的に伝えられることになったもので、近世の切紙としては、



というものである。同じく無極派の竜穏寺系統でもその月両箇の公案は伝承されたと見られ、竜穏寺末柄木県金剛寺所蔵の泰叟派の門参である『泰叟派秘参』にも取り上げられ、

月両ヶヲ、師對面而坐ス、師云着語ヲ、代、君モ以<sup>ニ</sup>此明<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>上照、臣以<sup>ニ</sup>此明<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>下補、(格叟實趣)是<sup>ハ</sup>格叟之拳着也、(布州東播)布州和尚ハ着語ノ時大指ニ人指シユビヲ低ク当テ君モ以<sup>ニ</sup>此明<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>上照シ、亦人指シ指ニ大指ヲ低ク当テ、臣モ以<sup>ニ</sup>此明<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>下補、亦指ヲトチガ子ニ入レチガヘテモ着語ヲスル也、亦補陀寺デハ模様デ拳ス也、○此モセウデ拳ス也、是ハ相続斗デ、月ノ見セウガ聞ヘヌゾ、(中略)亦竜穏寺デハ一彈指如何ト請也、同ジナガラ君臣合同ト、亦月ノヨシノ聞ルヤウニト請也、代、君以此ト補、心ハ是ハ月東嶺ニ上ルヲ見テ一彈指タゾ、ソノ當頭ヲ述ベタゾ、石胎蛇々胎石、(マヤ)蟹山峨山タツタ一枚タゾ処ガ洞上ノ兼中到タゾ、(川叟存稿)川叟派重離六爻ト拳スモ同心ヘタゾ、(中略)了庵和尚、派デ伝後兩則トハ、不識上當則是ヲ云也、最初兩則トハ大死底人公是也、子細ニハ図ト切紙デ明白ニスムベシ、

という括弧の仕方が記されている。しかも、末尾の記載に見

られるように、その公案が門参と切紙の双方に行われていたことがわかる。

さらにいえば、目録中の「無極授月江記文」も、この月両箇に関する切紙であったと思われる。無極が月江に授けた文といえば竜泰等には、「示ニ正文首座一家之大事」という無極真筆と伝承される附与状があり<sup>(14)</sup>、ここでも月両箇の話が拈提されており、恐らくこれと同一のものを切紙として伝承したものであろう。

このように、『室中切紙』の目録には、無極派の伝統といふものが受け継がれている様子が看取されるのであるが、無極派の本拠地である龍泰寺に伝承された切紙集『仏家一大事夜話』に、月両箇の参話が編録されなかつた理由は何であろうか。龍泰寺には門參としてまとめられた資料としては『宗

もちろんここでは月両箇の話は取り上げられているので、話頭として取り上げられなかつたわけではない。あるいは、開山の親筆として、別に切紙的に秘密伝授された「示三正文首座一家之大事」と題する相承品が存したので、敢てこれを『仏家一大事夜話』の中には収録しなかつたのであらうか。

五  
お  
わ  
り  
に

以上、『仏家一大事夜話』の資料的性格、位置付け、伝承

過程について述べたが、終止問題として残るのは、その成立年時と伝承経路である。中世末か近世の極初期頃の筆蹟と推定したが、それもあくまでも推測の域に止まるものであり、主観的な判断であることは否めない。また、伝承の問題に關しても、これが竜泰寺の古蔵から発見されたこと、内容に石屋派下と了庵派下の門参が比較されており、筆致上から「当門徒」とは了庵派下の門徒を意味すると判断されるという、言わば情況証拠を手掛かりとして、これを了庵派下の無極慧徹の系統に伝承されたものであろうとみたまでのことである。しかも、その資料的性質が、全体にわたって參詣形式で一貫しているという、切紙資料とはいっても、極めて特殊な形態の資料であるといふことも、他の切紙資料との比較検討の道を困難ならしめている原因の一つである。

しかし、項目の内容を検討してみると、全体的にいえば、**1**叢林行事や**2**行履物といった、叢林生活、修行生活といったものがその殆んどを占め、日々の修道生活の転回という具体的な生活を中心とした項目が編成されていることは、儀礼中心の近世江戸期の切紙流行の風潮とは異なる様相を窺うには充分である。特に江戸期になつて整備充実される室内三物関係に関しても、いまだ固定化していない時代の様子は推測できる。ただし、儀礼が固定化していないとはいっても、授戒に関しては別で、このことは『室中切紙』の中の切紙目録に

も顯著である。中世曹洞宗の地方展開と授戒との関係については、別に論じなければならない問題であろう。<sup>(15)</sup>

このように、『仏家一大事夜話』は、資料論的には極めて多くの問題を残してはいるが、その内容に看取される中世的性格、そして切紙の項目を網羅的に集成しているという点で、貴重な資料であることは間違いない。今後は、さらに、多くの中世原資料との比較検討を通してその位置付けを確定したいと考えている。

**注(1)**拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(1)」(駒沢大学仏教学部研究紀要)四十一号、昭和五十八年三月)なお、中世洞門抄物資料全般にわたる論稿としてすでに発表した論文には、「中世禪宗史研究と禪籍抄物資料」(飯田利行博士古稀記念東洋学論叢)所収、昭和五十六年一月、国書刊行会刊)、「中世禪宗教団の展開と禪籍抄物資料」(仏教の歴史的展開に見る諸形態)古田紹欽博士古稀記念論集一)所収、昭和五十六年五月、創文社刊)等がある。

(2)駒沢大学図書架蔵本中にも、円山道白下の切紙を集成した『室中切紙』(二冊、架蔵番号一七二一一五)をはじめ、『伝法室内切紙』(一冊、一七二一一六)『室内切紙贋写』(一冊、一七二一一七)『室中切紙』(一冊、一七二一一四)『大乘護國禪寺室中秘書』(一冊、忽一五八)等の数種類の集成本があり、近世切紙の全体像を窺うことができる。

(3)同書についてはすでに、拙稿「美濃国龍泰寺所蔵の門参資料について(上)」(駒沢大学仏教学部研究紀要)三十七号、

昭和五十四年三月)に於て、内容の展開の上から、門参資料の一種として紹介したが、これが切紙資料の集成であることは、同稿においても指摘しておいた。

(4)龍泰寺所蔵の史料、寺史、末寺等に関しては、拙著『美濃国祥雲山龍泰寺史』(昭和五十五年十一月、龍泰寺藏版)参考照。

(5)拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(1)」には六十種の項目を掲げたが、(9)諸堂ノ本尊ノ普賢<sup>(16)</sup>尊客ノ時、勤行止ムル心、廿日帰リ参、(40)掛絵参、の四項目が欠落していたので補つた。したがって『仏家一大事夜話』の項目総数は六十四種である。また、『仏家一大事夜話』『永平寺切紙目録』『洞上室内断紙揃非私記』の三者の項目対照比較表も、次のように改めておく。分類項目名も多少整理加筆した。

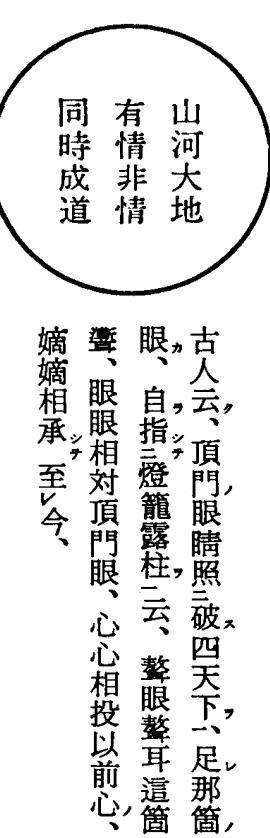
分類項目		仏家一大事夜話	永平寺切紙目録	揃非私記
1	叢林行事			
2	行履物			
3	堂塔・伽藍			
4	仏・菩薩			
5	追善・葬送供養			
6	室内(嗣法・血脉)			
7	参詣(宗旨・公案・口訣)			
8	儀礼(授戒・点眼・臨時行事)			
9	祈禱・呪術			
10	神仏習合			
11	吉凶・ト占			

(6) 前掲拙稿「美濃國竜泰寺所蔵の門參資料について(上)」参照。

(7) 金田弘「洞門抄物類書目解題・続稿」(『国学院雑誌』七八卷十一号、昭和五十二年十一月) 参照。

(8) 拙稿「中世曹洞宗における切紙相承について」(『印度学仏教学研究』三十卷二号、昭和五十七年三月) 参照。

(9) 「頂門眼切紙」とは、



というものであるが、この切紙の原初形態を示すのが、大

野市宝慶寺所蔵の、寂円が義雲に与えたとされる一軸の法語

に、

六祖曰、頂門眼照破四天下、是那箇眼睛、自面前指灯籠柱  
云、擎眼擎耳這箇箇、曰、眼々相對頂門眼、心々相投已前  
心、  
永平大仏道投機曰、頭対眉兮、耳対肩、此眼喚作頂門眼、  
是即正法眼也、一切花老梅樹、是即瞿曇眼睛也、正伝承當  
此拈頂門眼睛、百億須弥百億日月、無邊風月唯沙門一眼睛  
也、去不尽乾坤灯外灯、亦寂円云、我祖翁此話投機、我亦  
二十年前涕淚悲嘆箇話當著、眼者惣名也、明一事中円真仏  
性為也、是我豈恰契悟、觸體前本来靈、照徹毘盧頂顛平、

此眼揆開則明々不明、又合則暗々不暗、雖然又不預開合  
也、或十八眼或五門、以作頂門眼更大哉錯也、雖與麼、其  
亦不捨莫而已、透徹此話即井驢話、三悟道目前真大道、正  
法眼法身呈露、何況其徒亦復開願、非正嫡未曾知之、若不  
知之、實者學道未弁正邪、奚為分別、深可秘密、未伝授底  
人不可授之者也、

当山開山真筆深不可入他見

龍天護法善神百拜

寂円和尚附与義雲和尚

とあるのがそれで、「永平大仏」すなわち道元の投機がこの  
六祖の頂門眼の法語によることを明記している。また、全く  
同一の切紙が「頂門眼の大夏」として京都府の甘露寺という  
寂円派の寺院に伝承されており、この伝承は寂円派のもので  
あつたことがわかる。拙稿「曹洞宗寂円派の歴史的性質」  
(『禅宗の諸問題』所収、昭和五十四年十二月、雄山閣刊) 参  
照。

(10) 莊山紹瑾(一二六八~一三二五)が古則百六十二種について拈提したとされる『報恩録』所載のもので、次のようなものである。

自投機頌ニ云、身心脱落合同船、掛得蒲帆得客船、脱落身  
心真海裏、合同船子擲燒眼、(『曹全』宗源下、五六三頁)  
また『宗門之全機三十四闋』(駒沢大学図書館所蔵『如元格  
外集』収録)にも同種の投機の偈が載せられており、次のよ  
うなものである。

脱落合同船、掛得蒲帆待客仙、脱落身心空海外、合同船子  
擲橈眠、子以不藏爺攘羊、沙門道元九拜、

(11) 前掲金田弘氏論稿参照

(12)(14) 無極慧徹開創の龍泰寺に所蔵される、月江正文に示した無極真筆の附与状には、

示ニ正文首座ニ家之大事、

フシキ上ノ一句、不識上、月ノ二マイ、月兩ヶ、ナヘンサ  
ラニハントアルアリ、偏正一サイニ行ス、幻人ノ參、本位  
ノ中分ニ偏正、性見ノ人、タンテキノ一句  
太平山裏老禪和、不<sub>レ</sub>動<sub>ニ</sub>干才<sub>二</sub>弁<sub>ニ</sub>類瑕、十二時中端的ノ眼、  
会慶、静処婆婆詞、

拈花ミセウ、ルリコ中ノ妙薬、其外不説、能々可護持、

住竜泉禪寺慧徹叟 (花押)

とある。

(13) 前掲拙稿「中世曹洞宗における切紙相承について」参照。

(14) 中世曹洞宗と授戒との関係について論じたものとしては、  
廣瀬良弘「中世禪林の布教活動—曹洞禪の授戒会について—」  
(『印度学仏教学研究』二十四巻二号、昭和五十一年三月)、同  
氏「中世禪僧と授戒会—愛知県知多郡乾坤院蔵『血脈衆』『小  
師帳』の分析を中心として—」(『民族史学の方法』所収、昭  
和五十二年八月、雄山閣刊)がある。

付記 永光寺所蔵の切紙および先の稿における同寺『截紙之目

録』は、国学院大学教授金田弘先生に資料提供して頂いたものである。記して学恩に感謝致します。

## 翻刻凡例

一、本資料は、中世末期頃に集成されたとみられる切紙の全容を伝える貴重なテキストとして、岐阜竜泰寺所蔵の『仏家一大事夜話』と題する書写本を油印翻刻したものである。その書写年時については、中世末をさほど下らない時期と推定される。

一、翻刻に当つては、原則として原本のままとしたが、使用活字については、新旧書体によつて著しく意味が異なる場合以外は、新字体に統一した。

一、異体字・俗字・古字・別字などについても、原則として原本に従つたが、省文等については、組版の関係上、活字用正字に改めたものもある。例を示せば次の如くである。

众→衆 广→麿 广→磨 幾→機 它→陀 や→代  
四→羅 早→畢

### 仏家一大事夜話（表紙）

(1) 仏家之事 師云、勤行ノ二字、先ツ勤トハ何ヲツトメタソ、云、識情ヲ犯サズ塵勞起サズ、時々ツトメテ走、師云、行ヲ云ヘ、云、坐禪修行怠タラヌカ行テ走、師云、落居ヲ、云、無心無念カ勤行ノ畢竟テ走、臥輪ノ修行ナリ、師云、何トテ三時ノ行時トハ云タソ、三時ノ定メヲ、云、過現未ヲ一致ニ觀念スルニ依テ三時ト定メテ走、其ノ落居ヲ、云、徹底無心無念ノ時、法報應ノ三身ガツニ皈シテ走、師云、畢竟ヲ、貪慾痴ノ三毒ヲ除カン為メテ走、

ただし、次のような場合は、そのままとした。

更（事） 版（帰） 吊（弔） 碍（礙） 灵（靈）

一、古用仮名文字についても、できる限り原本通りに表記するようにつとめた。

「（コト） ノ（シテ、シタ） ヘ（ナリ）

一、段落については、原文では改行せず、△印でこれを示しているが、便宜上整理番号を付し、改行した。また、適宜

読点（、）を付して、意味理解に便ならしめた。

一、明らかに誤りと思われる表記についても原文通りとしたが、右傍に（）内にその旨趣を記しておいた。

一、判続不明文字については、字数に応じて□・□□・□□□・□等で示した。

一、丁数の表記は、本文中の（）内に該当丁数、及び表（オ）裏（ウ）の別を記しておいた。

(2)

△禪家ノ本尊ニハ釈迦ヲコソ要シウズニ、何トテ觀音經ヲバ誦タソ、云、濁世ノ衆生ヲ救ウ為メテ走、師云、救イ羊ヲ、祖仏凡夫有情悲情、乾坤大地廿五有、円通普門ノ境ニ余タ者ハ走ヌ、師云、喚<sup>イ</sup>什麼円通普門ノ境トナサン、学作レ一円相、心ハ、總在此中円ナリ、披毛モ自此得作仏、亦依他ト云心也、師云、一分奉釈迦牟尼仏、一分奉多宝仏塔ト処テ、合掌ヲバスルソ、云、世尊ノ伝授ヲ断サセマイ為テ走、師云、家ノ大事ハ何ント合タソ、云、是カ一切ノ安坐点眼テ走、心ハ、安坐点眼ノ時キ、一分奉一塔ト云ヲカ入ルヘ、新筆ヲ一方ソメテキット眼口 一方□□唱テ其ノ仏ノ名号ヲ唱ル也、亦一方ヲ染メ(1オ)テキット眼ニ点ノ□□□唱□名号ヲ唱ル也、点眼セヌ已前ハ空相ヘ、点眼スレハ沈ヌ□□、正中来ヘ、細□本参ニアリ、師云、大悲咒ヲ定マツテ五返ヨンタル子細ヲ云ヘ、云、五濁惡世ヲ澄シメウ為テ走、師云、澄メ羊ヲ、云、打成一返ニ誦シテ走、心ハ、千手陀羅尼ト云テ觀音經ト可心得ヘ、五濁ハ却濁煩惱濁衆生濁見濁分濁是也、

(3)

△日中ヲ何ニトテ主ノ祈禱ニハスルソ、家ノ大夏ノ上テ一句云ヘ、云、日ハ火也、火ハ心也、心ハ我也呈ニ主ノ祈禱テ走、自身他身体無二ト心得ヘキヘ、師云、何トテ灯ヲバ滅シタソ、云、日ト心ト隔テ無イ時、徹底火ト呈ニ滅<sup>ケシ</sup>テ走、心ハ、爰ニアル火ト見レバ目前ノ火ニ用所ハ無キヘ、師云、落居ヲ、云、徹底無心無念ノ時、心空心如無二無別テ走、師云、曹洞宗ワ中ヲ犯ヌガ、何トテ中ノ字ヲ学シタソ、云、徹底中ノ時サタハ走ヌ、師云、中ノ時キ中ニ立ツ心ヲ、云、徹底中ノ時久遠今時共ニ欠キ走ヌ、意ハ、独在ノ地ヘ、師云、金剛經ヲ誦ム心ヲ、云、本心<sup>不生不滅ナホトニ</sup>不老ナ呈ニ、金剛不壞ノ經ヲヨンデ走、師云、長ク誦タ心ヲ、云、真ガ主ノ本性テ走、師云、尊勝陀羅尼ヨンタ機ヲ、云、尊機モ尊勝モアルカ主テ走、

(4)

△日ノ晚ル<sup>イ</sup>行夏ヲ、何せニ放散トハ云タソ、師云(1ウ)、放ヲ云ヘ、毎日妄心妄念ヲ放スルニ依云テ走、師云、徹底無心无念ノ時何ノ妄心カ在タソ、云、捨テ、走、師云、何ヲ捨テタソ、云、法尚應捨、何況非法、師云、參ヲ、云、經咒一返ノ時端然無心無念本仏ニ住メ走、意ハ、住スルト云ガ參也、師云、回向ニ軸ノ無イハ何ントアル道リタソ、云、斷絶ノ理ナク始終一般ノ理テ走、謂レハ、軸カアレハソコ<sup>ノ</sup>留マル呈ニ断絶ナリ、然ル間祈禱ノ時回向ヲバサラリ開イテ末マテキット見テ、亦初メヲ見回ノヨムガ本ナリ、志シノ回向ヲハ次第ニ開ク<sup>ノ</sup>ヨムナリ、是ハ輪回ナイ理ヘ、施斎<sup>(ママ)</sup>ノ時キハ報地者トヨミアゲサマニ外エ回向ノロヲナケ出ノ巻ヘキ、是ハ維那僧ノ習イヘ、私ノ儀ヘ、

(5)

△四時ノ坐禪ト云ハ、禪僧ワ十二時中スルカ本ナリ、然ルヲ、何ントテ四時ノ坐禪トハ定メタソ、□四相ヲ離レウガ為メテ走、謂<sup>イハニル</sup>四相ト云ハ無我相無人相無衆生相無壽者相ヘ、アレトモ此デハ只地水火風ノ四大ヘ、何ニナレハ、無念無相ノ時

空マテハ、四大ハ出ヌソ、師云、仏ノ時キハ二時ノ陀羅尼ハナカツタガ、ナニトテ天童山デ□□始□、云、徧正ニ落ヌ処ヲ祈念シテ走、意ハ(2オ)陰陽不到ノ主ヲ□、□、□承当カ徧正陰陽知不知ヨ呈ニ、陀羅尼ハ明暗ニ落ヌ羊ニヨムヘ、時分カ肝要ヘ、時合ト云モ爰ノコヘ、師云、其コニ惡テワアルマイヘ、□ルカ何ニヲ祈念スルソ、云、末サウ、云、処エコソ障碍ヲバナシ走エ、云、ソレコソ障碍ヨ、

- (6) △土地神ハ何ント仏法ヲバ守護シタソ、云、解会ノ出ヌ処ヲ守護シテ走、師云、其ノ心ヲ、云、徹底無心無念ノ時、本師本仏ニ落住シテ走、師云、土地神ハ一体ダカ、何ントテ三国ノ仏法ヲバ守護シタソ、云、空性空体カ神ノ本体ナ呈ニ、ドッコニ欠ルヲハ走ヌ、師云、其落居ヲ、云、無心無念ノ時神ノ和光ハ同塵ノ上ニモ現シテ走、師云、何ヲ喚テ神光トハナシタソ、云、本地ノ風光テ走、師云、本地ノ風光トハ、云、根本無明ノ本光テ走、意ワ黒光ナリ、会得ノ出ヌ処ナリ、石屋和尚、竹居和尚問玉ウ、陀羅尼ハ理度ニ落ヌガ肝要テゴザアルガ、何トテ長クワ御ヨマセアルソ、屋ノ曰、一句道将来レ、居呈メ云、曹洞宗守ル処テゴササウナ、屋曰、猶モ細蜜道イ来レ、云、回互テ走、屋ノ、二人ト伝受スルコナカレ、居云、高声ニ誦ム用所アリヤ、師云、アリ、居云、是何用所ソ、師云、一句道将来、云、煩惱ノ夢ヲ覺ウカ為テ走、屋曰、仏家ニハ何(2ウ)ト見ウスソ、云、聞法結縁ノ為テ走、師云、八句陀羅尼(煩惱消滅ノ咒トモ云ヘ)六賊煩惱ヲ除為、光明真言ハ自己ノ光明ヲ發スル咒、青面金剛咒ハ惡テ鬼神塵勞妄相ヲ除キ收ウ為メヘ、亦三戸ヲ開ウ為テ走、意ハ、庚申ノ本尊ナ呈ニ、彭候戸彭常戸明児戸ヲ去レバ我カ身本体ヘ、仏陀咒ハ万病消滅ノ咒、隨求陀羅尼ハ諸願成就ノ咒ヘ、亦一切衆生成仏ノ咒ヘ、
- (7) △祖師堂ノ參、云、頭々祖師意、物々祖師意テ走、師云、其レハ何ニトテ、云、只聞只見居タ時キ真如法界一如テ走、意ハ、心如ハ自己ヘ、法界ハ目前ヘ、自己目前一致ノ時スキハ走ヌ、云、定相ナイカ活祖ト見レハ卒トモスキハ走ヌ、師云、畢竟ヲ、云、柳ミトリ花紅イカ真ノ活祖テ走、師云、其ノ落居ヲ、云、左之右之大定テ走、
- (8) △御影堂ヲ、何ニトテ真前テ法花経ヲ読ムソ、云、仏法ハ妙處ヲ肝要トシテ走、師云、其ノ妙處ヲ、云、妙ハ両處ニ龍ト化シテ走、師云、句ヲ、妙ハ有ニ一漚光、師云、蓮花ヲ、云、心花發明令法久住ガ心地テ走、意ハ、本心ト云心ヘ、師云、何ニトメ諸經ノ総名ヲ経トハ云タソ、云、一切衆生ヲ不<sup>レ</sup>泄救ウ為テ走、師云、何ニヲ本トシテ妙法蓮花経トハ説イタリ、云、法花空有□五輪五味ヲ本トシテ走、師云、畢竟如何ント説(3オ)タソ、云、幻々ト説イ走、
- (9) △諸堂ノ本尊ニ何トテ普賢ヲバ用タソ、云、一切衆生ヲ普ク導シウスル為テ走、謂レハ、灵山テ祠堂法事テ有<sup>レ</sup>タト云説

モアリ、亦賢ヲミチビクト云テ用ルカ、師云、普賢ノ境界ヲ、云、徹底無心無念ノ時キ三界ガ普賢ノ境界テ走、師云、其落居ヲ、云、一片湛然時、定水ニメ心水清浄テ走、畢竟ハ、坐禪正当ヘ、私云、此ニ云フデハナケレトモ、平生云更ソ、旦那ヲバ仏ノ如クセヨト云向ソ、

(10) △鉢、師云、鉢ヲ食堂デコソ行ウズカ、何セニ僧堂デハ行ウソ、云、法輪ノ転スル処ガ雲堂ナニ依テ、食輪ヲモ僧堂テ行テ走、云、食輪法輪一般テ走、先聖ヨリ拳処一ツアリ、師云、仏家デハ何ト見ウソ、云、法喜禪悅食カ肝要ナニ依テ、堂中テハ行ウテ走、師云、法喜禪悅食ト云、畢竟用所ヲ、云、祖仏凡夫ノ恵命ヲ繼イテ走、

(11) △小施餓鬼之參、師云、先ツ了知シ羊ヲ、云、極無心ノ処テ走、師云、了知シタ心ヲ、云、イヤ／＼知リ走ヌ、ト云ハ、知ツタト云ハ無心デワ無イソ、心ロハ無心ノ処カ法界ノ性、仏祖ノ死処ヘ、師云、法界ノ性ノ應現シ羊ヲ、云、呈シウドシタハ錯テ走、師云、夫レハ何トテ、云、無言無說(3ウ)ノ処カ薦最初テ走、意ハ、法界ノ性ト云最初ノ当リ派ニアルベシ、何トモ伸ラレヌ一物ノコヘ、師云、小餓<sup>(施餓)</sup>施鬼ノ時読マヌ心ヲ、云、残スガ曹洞宗ノ聯続テ走、師云、七如來ヲ転却スル心ヲ、云、回互テ走、師云、前後ヲ残シ誦シタル心ヲ、云、十成ヲ忌テ走、師云、南無三滿多广它婆<sup>テ</sup>水ヲ祭ル咒ヲ、云、此咒ガ心水テ走、師云、夫レハ何ナントテ、云、湛然一片ノ時定水ノ心眼テ走、廿一返誦ムモ一念ノ義ヘ、謂ハ、饅ノ一字ヲ水輪ノ呪ト云ヘ、亦一機万返ノ呪トモ云ヘ、故ニ爰ニ祭レバ普ク通スルヘ、畢竟ハ此ノ心ナラヌ処ハナイソ、或説ニ、饅ノ字澄<sup>ニヨリテ</sup>テ誦メバ差ウナリ、濁<sup>ニヨリテ</sup>誦ムカ吉キヘ、濁タ時水ノ形ミツ鏡トヨムヘト云ハ、一切ノ冥爰ニウツルヘ、師云、水ヲ祭ル時キノ心持チヲ、云、徹底凡夫ニ土ノ成テ走、師云、成リ羊ヲ、云、何トモ思イ走ヌ、爰ハ只無心一片ニ祭ルヘ、此時維那ノ祭ルハ不レ可<sup>レ</sup>然、ソレモ心有<sup>ル</sup>維那ナラハ如何タルベシ、只師家ノ祭ルガ好キソ、謂レハ、末ニハ祭ル処無キヘ、楞嚴咒始ツテ祭ルハ、私ノ冥ニ祭ル、此ノ呪ハ皆人説ナル故ニ誦ヌヘ、武帝ノ説ナリ、此未願以此功德一蜜ヲ、云、皆堂サシウカ為メテ走、私云、七鬼神ノ名ヲ觀念メ(4オ)飯ヲ七筋<sup>ハシ</sup>水ノコヲ七口<sup>ハシ</sup>一虔祭テ命廿一度ヘ、即チ一念ナリ、亦棚ノ真中ニ飯ヲ置キ、左右ニ米与<sup>レ</sup>水ヲク<sup>ハシ</sup>心ノ字ト心得テ燒香スヘシ、肝要ヘ、

(12) △祝聖之參、師云、祝心ノ道理アリ一句道ヘ、云、心王ノ本命元辰ヲ祝シ走、師云、心王ノ収メ羊ヲ、云、廓然無聖真俗不二ノ処ヲ収テ走、師云、祝迦ハ何ントテ王ノ祈念ニ祝聖ヲバ誦シタソ、云、仏法王法一致ナ呈ニ誦テ走、師云、心王ノ収マリ羊ヲ、云、極無心ノ処ガ心王ノ収リテ走、云、亦無相無念ノ時キ只一心テ走、師云、燒香ノ大豆ヲ、云、五薰香テ走、

五分法身香ノ享ヘ、喚レ何、五分法身香トハナシタソ、云、戒香定香恵香解脱香<sup>(マ)</sup>脱知見香テ走、師云、薰シ<sup>(タ)</sup>羊ヲ、云、尽天尽地此ノ薰香テ柱ヘテ走、師云、薰シ<sup>(タ)</sup>羊ヲ、云、坐禪定力ノ時、不断薰シテ走、師云、燒香ノ時キ香ヲツマンテ円相ヲナシテクブル理ヲ、云、上界ノ諸天声聞縁覚仏<sup>(菩薩)</sup>井神祇冥道下界ノ竜神我<sup>(マ)</sup>鬼畜生修羅人天尽ク一炉ニ収ウカ為メテ走、師云、畢竟ヲ、云、徹底無念ノ時法身ノ全体テ走、

(13) △鐘鼓之參、師云、鐘鼓ヲ鳴ラシタ理ヲ、云、生死無常ノ理ヲ凡夫ニ知ラシメウ為テ走、師云、真実底ノ理ヲ、云、諸行(4ウ)無常一為常<sup>(泰)</sup>テ走、師云、尊宿ノ來監ノ時キ鐘鼓留理ヲ、云、珍来ヲ謝ウガ為テ走、師云、イマ一説アルソ、云、善知識ハ生死透脱ナ呈ニ、知ラシムルニ及ヒ走ヌ、亦云、不生不滅生死透脱ノ自由ヲ得ルカ声前ノ一句ナ呈ニ止メテ走ウ、

(14) △石屋和尚竹居ニ示ノ云、怠慢ナク勤行スルカ、尊客ノ時止ムル心ヲ、云、別シテ走ヤ、屋云、未在更道、居云、一仏ノ出世テ走、屋云、好言語々々、心、知識ノ來過カ仏ノ出世ヘ、別ニ誦經ハ入ラヌソ、師云、鶏鳴ニ点ヲ打心ヲ、云、獅子ノ一吼ヲ学テ走、師云、学ンタ心ヲ、云、無明三毒ノ邪魔外道ヲ殺ウカ為テ走、亦塵勞妄相<sup>(マ)</sup>ヲ拡カ為テ走、師云、殺シ<sup>(タ)</sup>羊ヲ、云、尽天尽地此獅子ノ一吼テ柱テ走、亦カラノト笑、心ハ、驚心ノ正当幾空劫ニ沈ムヲ喚起ス処テ常ヲカヘシタソ、亦私云、暁ノ鉛鈴ヲバ、三足行テカラノト三足行テカラノトフル者ソ、是レハ獅子ノ身ヲ振ルヲ表シタソ、

(15) △小開靜ノ參ヲ、静居ナ呈ニ定<sup>(チヤウ)</sup>モ一ツヘ、云、一チ残メ走、師云、猶在有<sup>(ル)</sup>、云、サテ<sup>(タ)</sup>走、心ハ、小開靜ト云ハ、樹<sup>(タ)</sup>心タリ、ケツゾク幾ト云モ向ウタソ、建立不斷<sup>(5オ)</sup>テ点<sup>(アシ)</sup>ハヤガテヒツ付テ長半バカリヲ打ツ者ノタソト云ハ、樹<sup>(タ)</sup>心タリ、ケツゾク幾ト云モ向ウタソ、建立不斷<sup>(5オ)</sup>義ヘ、

(16) △大開靜<sup>(タ)</sup>口<sup>(タ)</sup>餓鬼畜生修羅人天ニ六門ヲ開カシウ為テ走、心ハ、眼耳鼻舌心意是ヘ、師云、開キ<sup>(タ)</sup>羊ヲ、云、鐘聲ヲ聞鼓声ヲ聞ク処テ無明ノ窠窟ヲ離シテ走、師云、家ノ大夏ニハドコニ見ズソ、云、門ヲ閉チ門ヲ開クワ真賊ヲ入レマイ為テ走、向上ノ參ニ真賊ノ沙汰アリ、儒釈道ノ參ノ透リヘ、次第ノニツメテ入テ足土着ヌカ真賊ヘ、師云、本ノ參得ニハトコニ合ベキソ、云、門ヲ開クガ聖諦第一儀、門ヲ開クガ廓然無聖テ走、

(17) △土地堂団子供<sup>(タ)</sup>羊ヲ、云、赤色ヲ云ヘ、云、夏ヲ司ウ為テ走、師云、白色ヲ、云、秋ヲ司ウ為テ走、師云、赤白ハ聞エタカ、ナニトテ黒色ノサタハセヌソ、亦云、黒色ハ根本ナ呈ニ定メラレ走ヌ、心ハ、時ノ王スルヲ一番ニ供<sup>(シテ)</sup>ス其次第ノニ供スルモアリ、時ノ王スルヲ後ニ供スル理モアリ、維那ノ習ニアリ、當寺ハ監寺カ供スルヘ、

(18) △血脉参ヲ、云、一円相ヲ作、師、夫ハ何トテ血脉テハアルソ、云、諸仏衆生同一体テ走、云、聖人モ此ヨリツ、ケ、凡人モ爰ヨリ、

(19) ▽命脈ノ参ヲ、云、無カ諸仏ノ骨肉デ走、心ハ、空性空体カ仏祖ノ命脈テ走、師云、命脈ノ二字ヲ分ケテ、先ツ命ノ字ヲ、云、無一物カ本命元辰テ走、師云、脈ヲ、無明ノ無一物ガ無実無際テ走、亦命ヲ、云、日テ走、脈ヲ、月テ走、畢竟力ノ要ヘ、

(20) △經教参ヲ、云、只ダ(5ウ)居ウヨリワテ走、師云、看經ノ眼ヲ、云、弁処カ走ヌ、師云、弁処ナイ眼ヲ、智不到ノ境界異弁テ走、心ハ、亦別ニ異弁ノ眼ト云カアルソ、一拶ニ、看經ノ眼ト出ス時ト、只看經ト出スハ別ヘ、亦松杉ヲモ爰ニ引合テ出スソ、只ヲリナクサミニ栽エタマデヨ、

(21) △鉢ノ参ヲ、云、尽乾坤カ一鉢テ走、心ハ、満瓶ヘ、師云、夫レニハ何ニヲ盛タソ、云、桃紅李白薔薇紫、自代云、皮毛作仏シユン動含灵皆盛テ走、師云、開羊ヲ、云、東西南北四維上下、

(22) △途中ヨリ廿日飯リ時、道元如何是襪子ト問エバ、天童淨云、左ト御答話有タ処テ、元大悟タソ呈ニ、大悟ノ機ヲ、云、左レ右逢レ源、

(23) △柱杖之参ヲ、云、無心無念テ走、師云、其レカ何トテ主杖テハアルソ、云、三世諸仏歴代祖師モ此ニ扶テ走、師云、拄杖ノ上下ノ赤キハ何ントノ道里ゾ、云、心ハ、火ヲ吐ク者テ走、云、畢竟ヲ、云、仏祖恵命テ走、心ハ、畢竟無心无念ノ処ガ本心本性タソ、其コニ三世共ニ流入シタソ、向看レバ心ヲ表シタ拄杖ヘ、

(24) △弘子之参ヲ、心不生一塵不立テ走、師云、何ントテ弘子テハアルソ、云、八万四千ノ妄想テ走、師云、夏コソ多ケ□何トテ馬尾ヲバ拈シタソ、云、一切衆生一子テ走、

(25) △楊枝ノ参、如淨禪師元和尚ニ問テ云、楊枝会麼、元云、不会、淨云、(6オ)我コソ齒クソテ走、□□ノ入道カ旨ノ垢クソ、入道ヲホリスツレバ空体ニ叶ソ、空体カ真ノ体タソ、亦楊枝ヲ口ニクワユレバ中ノ字タソト云ハ、入道ヲ犯ヌ時中道タソ、楊枝夙在レ手ト云モ指レ我、ト云□ヘト云ハ、我ヲ慚愧シタヨ時キ入道ハ出ヌソ、

(26) △一返消災過テ住持□護メ合掌ノ円相シテ普通問訊ヲ作ス、生得、仏殿行夏ノ時キハ諸役者散堂スル故ヘ、祝聖ノ処ニアル句面ヘ、

(2)

△五大六蘊参、師云、汝カ境界ヲ、居云、虛空人テ走、師云、虛空トハ何ンソ、云、空体空性が虛空人テ走、師云、空体空

性虛空ナラハ、何ニ者カ衣衫ヲ掛タソ、云、本空体空性ナルカ故ニ黒衣ヲ着テ走、師云、黒衣ヲ着タル理ヲ、云、黒処カ根

本ナニ依テ着テ走、師云、夫ナラハ黒衣ヨリテコソ有ズニ何トテ出世ヲバシテ衣ヲ易タソ、云、衆生済度ノ為テ走、師云、

済度シ羊ヲ、云、作一円相、師云、其ノ心ヲ、云、總在レ此中円、<sup>ナ</sup>師云、其ノ句ノ説話ヲ、云、有ト有ユル一切群類生ヲ此

心住セシメンカ為テ走、師云、其ノ心ニ住シ羊ヲ、云、心仏及衆生是三无差別テ走、師云、无差別ナラバ別ニ指示スルニ及

ヌソ、云、サテ走我ニ在三昧我知ルト知ラシメウ為テ走、師云、衆生隨類各得解脱ト悟テ走、

師云、解脱シ羊ウ(6ウ)、云、走ル者ハ元来走、飛者ハ元来飛ンテ走、師云、出世ノ紫衣ヲ用レハ何タル里ソ、云、紫衣カ

諸色ノ頂上テ走、因テ用イ走、師云、其レナレハ紫衣斗リヲコソ用カ、何トテ余色ヲバ用タソ、云、是レカ主ノ儘テ走、師

云、証処ヲ、云、自由自在渠<sup>カ</sup>三昧テ走、師云、猶モ子細ニ拳セ、云、只尽ニ凡情心念、駢ニ入亦馬腹ニモ入テ走、師云、駢

馬ノ境界ニ一任シ羊ヲ、云、徹底無心時キ業識ト隔テハ走、師云、本性トハ何ンソ、云、本心テ走、師云、何ントメガ本心

タソ、云、元來無相無形テ<sup>法境</sup>□空トモ徧滿ノソウ、<sup>心王</sup>師云、徧滿シ羊ヲ、云、尽十方一顆明珠テ走、師云、猶モ子細ニ拳セ、

云、頭々上明、物々上妙、<sup>ナ</sup>師云、五形六識ヲ以体トシタガ、何トテ無相無形テハアルソ、云、五形六識モ本心ノ変作テ走、

師云、変作シ羊ヲ、云、見モ聞モ<sup>ツカイ</sup>心ノ使テ走、師云、ソレハ見聞ニサエラレタソ、云、只見只聞テ走、師云、着語ヲ、

云、眼見耳聞無<sup>レ</sup>滲漏、師云、猶モ子細拳セ、云、心王妄不動六國一時廻テ走、師云、三衣一鉢トテ三衣ヲ着スルハ何タル

里ソ、云、三世一体ニ具足ノ走、師云、具足シ羊ヲ、云、過現未共一心テ走、師云、一鉢携エ羊ヲ、云、此空鉢一トテ、仏

祖衆生共命根ヲツ、ケテ走、師云、命根ノツ、ケ羊ヲ、云、法喜<sup>レ</sup>トヲ以テ続テ走、

(28)

△鬚髮參、師云、鬚髮ヲ(7オ)剃除スルハ何タル道理<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>滅除シテ走、師云、滅除シ羊ヲ、云、絲髮モ齒爪モ六識ノ根

本ト見レバ、煩惱ハ起キ走ヌソ、師云、其証拠ヲ、云、三世諸仏屎中虫、一代藏教拭糞古紙テ走、師云、其レハドコヨリ見

タソ、云、不知不可得ノ本位ヨリ見テ走、師云、夫レナラド髮ラハ剃ルマイガ、何ントテ剃タソ、云、頭團ヲ天トシテ走、

(29) △翻袖參、師云、翻袖ノ両輪ヲ何ヲ顯シタソ、云、日月両輪テ走、師云、是ヲ掛ル心ヲ、云、虛空我身一体ニメ、日月モ

爰ヨリ去來シテ走、師云、去來シ羊ヲ、云、心眼相照ノ走、

(30)

△手巾參、師云、手巾ノシメ羊ヲ、云、仏法藏帶テ走、師云、帶シ羊ヲ、云、万法皈<sup>レ</sup>一ト帶シテ走、師云、左ヲ短ク、

右ヲ長ク結タル心ヲ、云、縮ル手展ル手テ走、亦、縮トモ展トモ儘テ走、亦展縮自由テ走トモ拳スヘ、

(31) △襪子参、師云、襪子ノ踏ミ羊ヲ、云、何タル仏像ヲ踏ミ尊容ヲ踏ンテモ咎ハ走ヌ、師云、夫ハ何トテ、云、踏ンタトモ踏ヌトモ全ク知リ走ヌ、師云、八字ニ立タル心ヲ、云、八方通達テ走、師云、左ヨリハイテ右ヨリ脱イダル心ヲ、云、作一

円相、師云、ソノ心ヲ、左右逢<sup>レ</sup>源、前ニモ在く、

(32) △履参、師云、履ノ踏羊ヲ、云、履道一如ト踏ンテ走、師云、一如<sup>ナル</sup>時如何、云、尽大(7ウ)地是一足テ走、古句云、履道一如則<sup>ナル</sup>心諦在此裡、

(33) △複子参、師云、平包ノ巻キ羊ヲ、云、總在此中<sup>ナリ</sup>、云、森羅万像此ノ内ヨリ自由シテ走、師云、緒ノ結羊ヲ、云、邪正一如テ走、

(34) △傘<sup>サンカラカサ</sup>参、師云、傘何ヲ表シタソ、云、一株ノ大樹テ走、師云、直持タル心ヲ、云、此ノ一株ノ大樹カ天地ニ擇テ走、師云、開キ羊ヲ、云、直天下ヲ陰涼シテ走、師云、風雨炎天ヲ碍<sup>オマヘ</sup>ノル心ヲ、云、蓋天盖地、此樹下テ助テ走、

(35) △草鞋ノ参、師云、鞋ノハキ羊ヲ、云、此ノ消息カド<sup>ツ</sup>コニモ通タ走、師云、通シ羊ヲ、云、千里行ワ一步ヨリ進ムテ走、師云、進タル証拠ヲ、云、綠リ紅イカ此人ノ消跡テ走、師云、活祖ニ形相ワナイカ、何ントテ向ハ弄シタソ、云、花似<sup>レ</sup>残相、葉似<sup>レ</sup>衣、師云、好言語<sup>ハ</sup>、師云、緒ヲ引ソロエテ結ンタル心ヲ、云、不<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>邪路、正一路直入センカ為テ走、師云、直入ノ消息ヲ、云、歩々方外不<sup>レ</sup>運、師云、猶モ子細ニ、云、歩々踏着<sup>ス</sup>绿水青山、師云、此両句落居ヲ、云、高処<sup>ハ</sup>高処<sup>フ</sup>ミ低処<sup>ハ</sup>低処<sup>フ</sup>踏ンテ走、

(36) △四大五蘊ト云「コソアルニ、此ノ話ヲ四大五蘊トワ何ントテ示シタソ、云、口口ルハ四大五蘊ノ口<sup>外</sup>テ走、師云、外ヲ、云、混不(8オ)レ交、類不<sup>レ</sup>齊<sup>ヒトシカラ</sup>、師云、猶口云、捉<sup>レドモ</sup>不<sup>レ</sup>図、掣不<sup>レ</sup>開、師云、此句ノ説破セヨ、云、有カアルデモナク、無イカ無イテモ走ヌ、師云、真空ノ境界ヲ、云、作一円相、師云、句ヲ、云、万般巧妙一円空、師云、ソノ句説破セヨ、云、仏祖モ衆生モ和尚モ某モ、此一円ヨリ出テ此ノ一円ニ帰<sup>タラ</sup>ノ走、師云、去來ニ不度<sup>ハタラ</sup>一句、云、不知不識テ走、師云、畢竟ヲ、学只坐禪口<sup>ス</sup>ヘ、是石屋与<sup>レ</sup>竹居師弟上参也、

(37) △安坐点眼、師云、安坐点眼ヲ、代、具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量、点眼ノ時、新キ筆墨硯ヲ調テ、師像ノ前立倚テ筆ニ墨ヲ染テ、左ノ眼ニ点ノ唱テ云、威勢与<sup>レ</sup>愛想、慈眼視衆生、福聚海無量、亦別ノ筆ニ染テ、眉間ニ指アテ、即<sup>ニ</sup>

右眼ニ点メ云、一点水墨両処化レ竜、心ハ、両処威勢与愛想ハ、慈眼視衆生、福聚海無量ト三返唱ハ、亦一念不起メ唱云、威音王如來、古莊ニ嚴獅子之御座、安<sub>ニ</sub>坐報化金身<sub>ニ</sub>、作麼生カ坐<sub>レ</sub>安<sub>(安坐)</sub>、一分奉釈迦牟尼仏、一分奉多宝仏塔、亦、何仏デモ其仏体ヲ入ヘ、其ノ後坐禪ス、參禪ニ曰、安坐点眼ヲ、云、天地与我同根、万物与我一体ニ点眼シテ走、師云、其ノ証拠ヲ、云、我与大地有情非情同時成道、師云、真仏相見ヲ、云、日ルハ日光珠<sub>(8ウ)</sub>見、夜ハ月光珠ヲ見テ走、師云、威勢トハ何ヲ云タソ、云、仏ノ威光法ノ威風テ走、師云、愛想トハ何ソソ、云、慈眼カ愛想テ走、師云、何ヲ慈悲トハ云タソ、祖仏凡夫有情非情草木国土石隔テ無ク見ルカ慈悲テ走、師云、慈眼視羊ヲ、云、意ナウ見、意<sub>ナウヤ</sub>聞、意ナウ居テ走、師云、福聚海無量ヲ、云、修証カ福聚海無量テ走、師云、一点水墨ヲ、云、此一心テ走、師云、両処ニ化竜シ羊ヲ、左眼ハ日光右眼ハ月光珠ト点シテ走、師云、証拠ヲ、云、徹底無心ノ時キ、両輪共ニ入我々入テ走、師云、安坐シ羊ヲ、云、十方仏土ト坐シテ走、師云、何ニタルカ十方仏土タソ、云、十方虚空只是十方虚空、師云、威音王ノ古<sub>ニ</sub>獅子ノ御座ノ莊嚴シ羊ヲ、云、一念不起時、邪魔共ニ入り走ス、師云、全身ヲ安坐シ羊ヲ、云、過去心不可得現在心不可得未來心不可得ニ安坐シテ走、師云、証拠ヲ、云、此心仏力法報応ノ三身ト分テ走、以上挙着十八位之、屋与居之秘參ハ、可秘＼＼、

(38) △灵供参、仏ニ先ツ灵供ヲ備ヘ、茶湯ヲ献スルカ、喫シタ迹モナイカ、何ントテ跡ハナイソ、サテ喫セスンハ献シタ理ハナイソ呈ニ、灵供ノ供シ羊ヲ、云、通身無影像ト喫シテ走、師云、何ント滋味ヲ得タソ、云、蝶令食花薬如不損色香ト向喫シテ走、心、灵供ヲ献スル<sub>(9オ)</sub>眼カ肝要ヘ、膳ヲキット供スル処ニアルヘ、其コテ無影像ト喫スルヘ、本来ノ生死ニ至テハ無ヲ露スヘ、本来無心ノ性ト通メ時空ト顯レ、柳桜松楓桃紅李白カ其儘ノ面皮ヘ、

(39) △亦灵供ムケ羊ヲ、云、虛空ニ向テキット念スルヘ、一円相ヲナス、師云、ナセニ、云、總在此中円<sub>ナリ</sub>、師云、何ント与ヘタソ、云、空カ灵心テ走、師云、畢竟ヲ、云、滿瓶不<sub>ニ</sub>傾出<sub>一</sub>大地<sub>ニ</sub>肌人、師云、筋ノ立テ羊ヲ、云、堅ニ三際ヲ窮メ、横ニ十方ニ亘ル、心得ハ、卍字ヘ、畢竟三界唯一心ト心得ヘ、大夏ノ儀ヘ、

(40) △掛<sub>(絵)</sub>会參、師云、伝授ノ座ニハ仏像ヲコソ掛ズニ、何ントテ俗体ヲ掛ルソ、云、兒孫ヲツムケウガ為テ走、生得ハ維摩ノ絵ヲ掛ルカ本ヘ、何レモ俗体ノ絵ヘ、何セニナレハ、仏地ヲ枯レテ行ク呈ニ掛ルヘ、

(41) △襪子參、道元和尚帰朝ノ時、從<sub>ニ</sub>明州津<sub>ニ</sub>天童山<sub>ニ</sub>、廿日留リテ參得アル間、襪子參トモ、廿日飯リノ參トモ云ヘ、師云、襪ノ定メヲ、云、天地ノ二テ走、師云、天地ノ二ヲ何ントテ脚ニハ踏ンタソ、代、人ト生レテハ天地ノ影ヲ踏ンテ走、

師云、天地ハ何ニガ左何ニガ右タソ、云、地ハ陰左ト成テ走、師云、サテ右ハ、云、天ハ陽右テ走、師云、サテ着羊ヲ、云、此レガ三千威儀始メテ走、師云、左ヨリ着ルカ右ヨリ着ルカ、云、陰カ物ノ始リナ呈ニ、左ヨリ着テ走、師(9ウ)云、既ニ三千威儀ヲ、何トテ足ニハ踏ンタソ、云、天地カ五体ノ初テ走、師云、天地五体ナラハ、右ノ足ハ何ント、云、□ウイヤ、脱<sup>ヌ</sup>時キハ右ヨリヌイテ走、師云、左右ノ畢竟ヲ、云、一円空テ走、師云、空ノ体ヲ、云、心テ走、師云、心ドノ心ソ、云、円心テ走、師云、此襪子着ケテノ徳ハ、云、此ノ襪子着デハ、仏祖ノ頂顙ヲ踏ミ、袈裟ヲ踏ンテモ会ハ走ヌ、師云、立処ハ何ノ処ソ、云、満足円満ノ地ニ立テ走、師云、了地ハドコゾ、云、子学本学一致ノ処テ走、師云、ソコニ句ヲ、云、当<sup>レ</sup>台圓月無<sup>ニ</sup>障礙処、

(42) △竜天参、先竜天ト云ハ、人々具足ノ心ノコヘ、アレトモ我レニ在ル竜天トハ只ワ知<sup>レ</sup>マイソ、過去七仏ヨリ授戒ノ以后三  
仏法ヲ守護スルカ竜天ヘ呈ニ、人々具足ノ心ニ当的ノ旨カナクテハ、本心ニ当的スルカ竜天現然ヘ、向見タ時キ別ニ本尊ハ  
入ラヌソ、坐禅ノ正當爰カ大虛タソ処カ本心ニ竜天現然タリ、此時本心ハ白雲ニ乘メ居タソ、惡クスレバ雲霧ニサエラル<sup>シ</sup>  
ソ、サエラレヌ時ソコ<sup>ノ</sup>影迎シタソ、師云、竜天定ヲ、云、我レヲ拐メ此本心テ走、師云、畢竟ヲ、云、有<sup>ハヨリス</sup>自<sup>レ</sup>無、心  
ハ、展則沙界縮則方寸ト云向ヘ、爰ヨリ廿二社トモ現シタソ、此ノ本心ニ当的メミレバ別ニ竜天ワナイソト云ハ、三世不可  
得ノ心ノコヘ、或ハ日天月天弁才天虛空藏觀音勢至トハ(10オ)本心ノ喚換ヘタソ、サテ影迎ト云テ余所ヨリ来タコテハナ  
イ、坐徹<sup>(巡)</sup>一片ノ時、影迎ヘ、

(43) △廿一社順礼参、師云、參禪了レハ仏祖ノ列ニ入ルカ、何ニトテ神ヲハ礼拝シタソ、亦云、仏法擁護ノ沙門カ何トテ神ヲ  
ハ礼スルソ、云、西天テハ仏、唐土デハ祖、日本テハ神ヲ礼スルカ順テ走、師云、上七社、中七社、下七社ト云タソ、云、  
上七社ハ仏法ヲ守リ、中七社ハ子孫ヲバ繁団ノ為、下七社ハ此器ヲ全カラシメン為テ走、師云、生得、廿二社テアルヲ何ニ  
トテ廿一社ニハ祝タソ、云、一念<sup>ノ</sup>ト皈首セシメンカ為テ走、師云、竜天ノ看經ニ何ントテ諸經咒ヲバ誦スルソ、云、諸  
仏竜天同一體テ走、

(44) △没后作僧参、没后ニ僧ト作シ羊ヲ、云、イヤトモ応トモ云イ走ヌ、着語ヲ、無我相無人相説破セヨ、云、徹底無相ノ  
時、何トモ成テ走、師云、夫レガ何ニトテ僧ト作<sup>ナシ</sup>羊テハアルソ、云、イヤ共ウトモ云ワヌガ真ノ出家、師云、句ヲ、云、聖  
凡自知、

(45) △中陰破壇参、中陰破壇ヲ、地ヲ丁ト打テ、フット吹ク也、師云、句ヲ、吹別村過、師云、猶モ子細ニ、清風払明月、心ハ、汚染ヲ嫌ヘ、

(46) △隔国吊亡灵参、師云、遠キ亡者歛請シ羊ヲ、云、虛灵ノ在処ヲ觀念メ走、心ハ、虛而灵空而妙也ト心得ヘキヘ、師云、

亡灵ハ何処ヨリ来タソ、云、空ヨリ来テ走、師云、來リ羊ヲ、云、皆影テ走、師云、作レ善夏ヲ(10ウ)畢テ、亡者送リ羊ヲ、

拶眼ス、師云、何クヘ送タソ、空ニ送テ走、師云、着語ヲ、諸法空為坐、師云、サテハ空ニ留ウカ、云、一句了然空不空、

(47) △吉方勸請参、死人ヲ送ル時惡處ヲ善處ト作シ羊ヲ、作一円相、師、ソコニ句ヲ、十方仏土中、師云、何トテ、云、迷カ

故ニ三界城、悟故十方空、<sup>ヒヨン</sup>本来無東西、何処有南北、師云、畢竟ヲ、以大圓覺為我伽藍——性智、師云、猶モ子細ニ、十

方薄伽梵、一路涅槃門、

(48) △惡日連續参、師云、惡日連續之時展縮シ羊ヲ、作一円相、師云、五位テハトコニ當ツタソ、兼中到テ走、着語ヲ、云、

今時日用、混沌未分、展惡縮善、中間好日々大極時々大極、

(49) △塔婆書后点眼参、先筆ノ軸ヲ以テ一円相ヲ打ス、法報應ノ三身共一心、即亡者名唱ウ、其后燒香心々々ト唱テ合掌メ、

庵謨慶魯闡寧婆婆詞ト三返唱テ、閉目即空ト觀念メ弘袖ス、

(50) △塔婆參、云、若人欲了知三世一切仏、應觀法界性一切唯心造、師云、心ヨリ造羊ヲ、云、心即空テ走、師云、空ヨリ出

生シ羊ヲ、云、春発花夏涼風秋月冬雪アリテ走、師云、生死ヲ脱シ羊ヲ、放身ス、句ヲ、世間空空ニノ无、<sup>ナリ</sup>仏性空空真、

(51) △念誦參、師云、燒香ノ念誦シ羊ヲ、学吾ヲ指メ云、自身、師ヲ指メ云、他身、キット拳云(11オ)、体無二、師云、誦羊

ヲ、云、色無邊際作レ仏冥、師云、切心ヲ、云、一息断レ切ノ時節テ走、師云、正当恁麼時如何、云、有誰答話セン、師云、

生死交謝シ寒暑互遷リ羊ヲ、云、生スル時形ナレハ死スル時モ形ハ走ヌ、師云、其來電一停ルト云機ヲ、云、漚生与漚滅二

法本來齊、師云、百年——涅槃程ト云タル里ヲ、大海ニ一漚力生メ亦ザツト消□如クテ走、師云、回向ノ二字ヲ、学良久ノ

云、生モ死モ爰ニ帰シテ走、師云、上来ヲ、云、爰ニ來ツタカ、來タテモナク、去タカ、去タテモ走ヌ、師云、何ント生死

カ付イタソ、漚生漚滅迄テ走、茶傾三点ヲ、捨タトハ見走マイ、師云、何ノ見ウソ、水ノ漚ノ消草露消<sup>ハノヨレ</sup>タト見テ走、師

云、念誦受羊、山虛風落レ石、桜静月侵レ門、私ニ、念誦トハ口ニヨミ心念スルヲ云ヘ、

(52) △竜天參、師云、竜天トハ何ヲ崇タソ、云、卦テ走、師云、ドノ卦ソ、南方離卦テ走、離ノ卦トハ何ニヲ云タソ、此心テ

走、心トハ何ニヲ云タソ、本ナイ物テ走、真梁御唱へく、

53) △頂相参、師云、<sup>(マサ)</sup>鎮相ヲ、积迦モ達磨モ拈スレハ爰テ走、師云、客位ヲ、云、顕ハル、ワ今時逆路テ走、主位ヲ、云、顕

レヌカ頂相ノ一人テ走、畢竟ヲ、作ニ一円相、

54) △持戒参、<sup>亡者ニ戒授ケタ時、肯タカ肯ワヌカ、</sup>「着衣參、名ヲ授クルモ同シ」<sup>シテ、</sup>舉着モ同ヘ、

上無ニ正戒相、下無邪念心、

55) △宗旨鴛鴦参、師云、鴛鴦ノ約シ羊ヲ、我力旨指テ、此心テ走、師、其レカ何トテ犯央ノ約テハアルソ、云、伊我具足、<sup>シ</sup>我伊<sup>レ</sup>具足テ走、師云、句ヲ、代、世尊三昧世尊不知、迦葉三昧迦葉不<sup>レ</sup>知、心ハ、四七二三共ニ此約カナク<sup>(マサ)</sup>、宗旨ハ断絶

シウスソ、

56) △香炉ノ参、云、香炉定ヲ、学、我身ヲ指、師云、香ノ燒キ羊ヲ、云、出息入息テ走、師云、句ヲ、一炷烟中得ニ此心、

57) △坐具参、先ツ<sup>ザ</sup>坐具ヲ三ツニ折テ拝スルワ、三世不可得ノ心ナリ、知識ハ不<sup>レ</sup>折ニ敷クワ三世了達ノ心ヘ、サテ三ツニ折テ頭ヲクツト出メ拝ムソ、主ノ字ノ用所也、師云、坐具ヲ定ヨ、云、妙テ走、心ハ、一円相ノ用ヘ、爰ヲ物ノ始マリ總ノ極リト云タソ、爰ヨリ出爰収<sup>シ</sup>タソ、師云、句ヲ、唯独明了、余人所不見、此ノ妙処ハ独リ自知ヘ、二人ト知ヌ処タソ、師云、其レハ何トテ、云、豈容ニ先聖眼<sup>シ</sup>、古語ニ、妙在一<sup>ニ</sup>溫光<sup>ニ</sup>、豈——眼、此ニ至テハ千仏万祖モ眼カ及シソ、師云、其証拠ヲ、代、妙テ走、心ワ、足ドノミ羊ヘ、サテ、別ニ舉着スレバチガウヘ、此参ハ石屋門戸モ了庵門戸モ不<sup>レ</sup>差ナリ(12オ)、

58) △宗門船参、船ノ定ヲ、五尺ノ境ガイカ船テ走、何トテ、云、ドコニモ自由シテ走、師云、サテハ船頭カ有ウスソ、其ノ名ヲ吾レト答エテ、是レカ船頭テ走、師云、其船ニ積物カ有ズソ、云、眼耳鼻舌身意テ走、師云、其積物ヲロシ羊ヲ、云、一息截断ノ處テヲロシテ走、師云、其ノ皈シ羊ヲ、云、地水火風空ト皈シテ走、心、此舟ニ我□畜生修羅人天共ニ乗サルハナイソ、好乗リ以テ於イテ、此土西天エ自由シタソ、アルカ此舟ヲ一度乗リ捨ル時節ガアルソ、沙門平生此ノ心持ヲ忘レテ曲モナイン、爰ラ常住不退心ロニカケタ郎ニハ、別ニ修行ハ入ルマイソ、參禪別無<sup>レ</sup>秘法、只思ニ生死切<sup>ナル</sup>ト云モ、此舟ノ乗リ捨ル時節カ大夏テ走ソ、喫茶喫飯ノ上テモ是ヲ旨ニ於タラウニハ、閻羅老子ノ棒モ当ルマイソ、

59) △鎮守之参、天童如淨禪師云、曹洞有<sup>ニ</sup>鎮守參禪、未了人洞上不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>道師<sup>ヲ</sup>、道元和尚從<sup>ニ</sup>明州津<sup>(マサ)</sup>慶徳寺御皈、廿日在居被成、此參得了也、故ニ是ヲ廿日帰ノ參ト云ヘ、先ツ心得ハ、定白山ヲ鎮守トスヘキヘ、白山ト云ハ自己ノ功也、妙理ト云ハ

那時へ、大権現ハ垂迹ナリ、今時へ出タレトモ、<sup>カリ</sup>権ニ現タト見レバ、本位ヲバ離ヌ故ニ、白山妙理大権現ヲ其儘曹洞ノ三位  
トスルヘ、末向定<sup>(12ウ)</sup>テ於イテ、伊勢ヲモ春日ヲモ鎮守ニ勸請スルヘシ、師云、鎮守ノ請シ羊ヲ、爰嫌道ハ何ト云モ其レ  
ハ皆紅粉ヲヌル神トミタソ、其レハ汚穢不淨タソ、曹洞宗ノ鎮守ノ請シ羊ヲ不レ知シテ人ヲ吊テ参詣スレハ、七天大地エワ  
リ入玉ウ也、拳着ハ学師ノ前ニ至テ円相ヲナス也、爰ハ聞キ相通シテ拳せバ、其レハ空見外道ニ引レテ幾空劫ニ沈タヨト  
嫌ヘシ、師云、其ノ主ヲ、良久ス、此時善ニ不レ渡惡ニ不レ度ソ、別ニ鎮守カ有テコソ、師云、当人ナラバ説破ヲ、円ヨリ出  
テ円ニ皈テ走、円ヨリ出テ円ニ入シタ時、嫌ヘキ汚穢不淨カ在コソ茶毘場、直ニ鎮守ニ参ルハ、爰至テクルシユモナイソ、  
此參禪せスンバ、七天大地エワリ入玉ウト云也、亦常ニ巡堂ノ時キモ経テモ呪テモ読シテキット念ノ両眼ヲフサイテ皈ル、  
此時見余ノ処ハナイソ、爰ニアル天神七代地五代テ走、別ニ神カ在コソ、此參禪スル時、哥ヲ引クヘ、イメバイム忌マ子バ  
イマヌ神ナルニイムゾ己レカ心ロナリケリ、亦、チワヤフル吾カ心ヨリ成ス禍ヲ何レノ神カ余所ニ見ルヘキ、是レハ元和尚  
ヨリ以来ノ秘參ナリ、不可犯語ヘ、

(60) △白山參、師云、白山ノ定メヲ、云、チ□□□タカ不老ノ孤峰テ走、妙理ヲ、云、主中主テ走<sup>(13オ)</sup>、師云、句ヲ、諸山  
不レ墮レ□、師云、大権現ヲ、云、那辺不レ守レ空王殿、心ハ、白皆空處テ、千山ノ雪タソ、ソコニ墮せヌ時キ、孤峰不白テ妙  
理ノ主タソ呈、爰過去久遠ノ一仏出ヌソ、一向出テスメ、ソコニ現スト云ハ、本位ヨリ爰ニ下タコタソ呈ニ、句モ那辺——  
殿ト云不白、妙理タリ、今時ハ下レバ空王殿ヲバ守ラヌソ、心得大夏ヘ、

(61) △竜天參、師云、先ツ竜ヲ云エ、云、化現ノ身テ走、師云、天ヲ、云、不出ノ天カ本有円成ノ如来テ走、師云、受戒シ羊  
ヲ、云、化現ノ身ガ本有ノ住家、皈レハ不出ノ天本有ノ如来テ走、心ワ、竜ト云者ワ、出世ヲカマエテ、海ニ千年河ニ千年  
山ニ千年経テ頂キ至ル者ノソ呈ニ、爰百億ニ化身シ羊ヘ呈ニ、竜ハ至覚也、又天ト云ハ法身デ下ラズ経ズ不出世ナリ呈ニ、  
本覺ノ一仏ヘ、サテ受戒ハ至本不二尽不尽出不出一枚ヘ、爰カ宗旨ノ相続ヘ、是レハドノ門戸デモ相続シ了テ己後ノ參禪  
ヘ、

(62) △念誦參、師云、切以ヲ云ヘ、師ヲ趣倒ス、吾モ放身ス、師、其ノ意ヲ、云、先聖モ云レマジカツケルヨ、師云、其レハ  
何ントテ、云、ツ、ク者カ有テコソ、師云、生死交謝シ羊ヲ、云、漚生漚滅迄<sup>ト</sup>走、師云、寒暑互遷リ羊ヲ、云、瓦解<sup>(13ウ)</sup>  
永消ノ走、師云、末其ノ下テ一句云ヘ、云、身心脱落ノ走、師云、其ノ生シ羊□□、空ヨリ來テ空ニ去テ走、師云、已空タ

ガ、何トテ生死ハアルソ、云、有ハ影テ走、師云、影ト云心ヲ云ヘ、云、在ルカ有ルテモ無ク、無イガ無イデモ走ヌ、師云、電激レ長空<sup>ニ</sup>、波停レ大海<sup>ニ</sup>羊ヲ、云、当処出生当生滅尽、師云、此日即新円寂ヲ、云、万般巧妙一円空テ走、師云、空トハドコヲ指シタソ、云、一微デンモ無イ処ガ空テ走、師云、其レナラバ何トテ名道号ヲ書着、位牌ヲバ立タソ、云、化ニ有真テ走、師云、生縁已尽、大命俄落ヲ、云、薫熟不レ堪レ枝、師、其句ヲ説破セヨ、平生熟<sup>シ</sup>テホツクト落テ走、師云、諸行無常、寂滅為樂、何カ樂タソ、云、本国ニ帰ルカ樂テ走、師云、証拠ヲ、袖ヲ延テ云、万歳<sup>ノ</sup>、師云、其ノ意ヲ云ヘ、云、生トハ何ンソ、死トハ何ンソ、師云、其ナラバ何ト大衆ヲバ請メ諸聖ノ鴻名ヲ誦シタソ、云、儘テ走、師云、覺路ヲ莊嚴シ羊ヲ、云、柳自綠花自紅、

(63) △理趣分參、師云、相似般若ヲ、云、道理力皆相似般若テ走、師云、真ノ般若ヲ、云所得無イガ真ノ般若テ走、師云、世尊是三界ノ大道師<sup>信岩派ニ在ル</sup>テ在ルガ、何トテ十六善神ニハ守護<sup>(14)オ</sup>セラレタソ、云、説ク底ハ皆道理テ走、師云、守護不入ヲ、云、無心無念テ走、

(64) (1) 十三仏參、第一不動ヲ、代、無心無念ノ時キテ走、師云、其証拠ヲ、代、一念不生、全體現<sup>ゼン</sup>、師云、何ントテ火烟ヲバ立テタソ、代、智光ヲ発シテ走、師云、死人ノ請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、罪業ヲ焼却シ妄想ヲ縛接シテ走、師援<sup>云</sup>、□時如何、代、後念<sup>ノ</sup>ゾント切テ走、師云、サウンドコエヤラシメタソ、代、本空エヤラシメテ走、師云、何ントヤラシメタソ、代、作レ一円相、師云、救イ羊ヲ、代、良久ス、師云、其証拠ヲ、代、空合レ空以上九位<sup>ヘ</sup>、

(2) △第二釈迦ヲ、代、法界円満ノ仏テ走、師云、証拠ヲ、代、トツコモ此一仏テ拄テ走、我<sup>(マニ)</sup>鬼畜生修羅人天共ニ余ル<sup>ノ</sup>モナク欠ル<sup>ノ</sup>モ走ヌ、師云、死人請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、一字不說テ走、師云、時節ヲイエ、代、申ウトシタハ誤テ走、師云、サテ云イテハ、代、トツク申テ走、師云、誰レカ聞イタソ、代、空力聞イテ走、師云、救イ羊ヲ、代、一仏成道ノ時、乾坤大地森羅萬像、有情非情共ニ救イ了テ走、師云、畢竟ヲ、代、一念心中ガ無相無形ノ一仏ノ同体テ走、以上八位、△第三文殊境界ヲ、代、大智カ文殊ノ境界テ走、師云、大智、代、天地人仏衆生ト始ヌ、先キノ智テ走、師云、ドコヨリ發生シタソ、代、心ヨリ發生シ<sup>（14）ウ</sup>、師云、請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、智惠モ利根モ入り走、又師云、其ノ智<sup>ノ</sup>ヨリ求メタワ、代、自然智無師智力如來ノ智見力テ走、師云、其智ヲドコエ放下シタソ、代、一息截断ノ時節、能ク捨テ走、師云、救イ羊ヲ、代、坐禪一会ノ時、尽虛空偏法界カ本師本仏テ走、七位<sup>ヘ</sup>、

(二) △第四普賢ノ境界ヲ、清白円明ノ処カ普賢ノ境界テ走、師云、其ノ境界ヲ、代、ヒツト坐下ノ端的テ走、師云、其ノ境界ヲ、代、未爰カ普賢テ走、師云、請取羊ヲ、代、良久メ云、未爰ガ普賢テ走、師云、普賢ノ境界ヲ呈露セヨ、代、兀坐ノ端的、尽大地カ一ケノ白馬白象テ走、師云、白象白馬ヲ、代、尽大地ガ其儘ト見タ時、別テハ走ヌ、師云、畢竟ヲ、代、悟リ一点テ走、以上七位、

(三) △第五地蔵ヲ、先ツ地ヲ、代、尽大地カ井ノ一智テ拄テ走、師云、蔵ヲ、代、諸仏衆生森羅万像モ爰ニ取り爰ヨリ出テ走、師云、爰トハトコヲ云タソ、代、法地テ走、心ワ仏法ノ地ト云心也、師云、請取羊ヲ、代、其ノ境界ヲ引カヘズ、其儘心空ニ引道シテ走、師云、引道シ羊ヲ、代、根本ノ時地獄モ無ク天堂モ走ヌ、亦虛空陰々トノ錯杖ノ声斗リテ走トモ、師云、地蔵ノ手中玉ヲ云ヘ、代、不老ノ妙薬テ走、亦真珠テ走トモ、師云、何ント顯シ何ント服シタソ、代、一(15オ)息截断ノ界イ顯シ服ノ走、師云、救イ羊ヲ、代、尽十方一果ノ明珠テ走、師、其証拠ヲ、代、ドッコモ此仏性テ拄テ走、九位ヘ、

(四) △第六弥勒ノ境界ヲ、代、不出ノ一仏テ走、師云、証拠ヲ、代、一氣未発ノ処ニ徹底ノ走、師云、徹底シ羊ヲ、代、仏法不現前、不得成仏道、師云、請取羊ヲ、代、一息截断時節、弥勒ノ樓閣ヲ推開ソ走、師云、弥勒ニ相見シ羊ヲ、代、根本□至テワ何レニモ無ケルヨト相見シテ走、師云、畢竟ヲ、代、衆生無キ処ガ仏性テ走、師云、仏性ヲ、代、過現未共ニ一仏心性テ拄テ走、以上七位ヘ、

(五) △第七藥師ノ本体ヲ、代、餓鬼——天祖仏凡夫草木土石ノ命根命脈トナリ、亦精魂ト成テ走、師云、瑠璃ノ壺ノ持シ羊ヲ、代、乾坤必塞ス、師云、請取羊ヲ、代、一息截断時節、病即消滅シテ走、師云、消滅シ羊ヲ、代、寂滅為樂テ走、師云、師云、祐カ不老不死ノ一人ヲ、代、乾坤大地第二人無、師云、十二神出テ守護シ羊ヲ、代、其レニ守護シテ走、師云、其レニ守護シ羊ヲ、代、柳緑ト守護シ、花紅イト守護シテ走、師云、救イ羊ヲ、代、尽大地ガ一藥テ走、此時キ地獄ハ走ヌ、八位ヘ、

(六) △第八觀音ノ全体ヲ、代、一寸ト見一寸ト聞イタ時、徹底觀音テ走、師云、徹底シ羊ヲ、代、無心無念ノ時キ处处々観□□音テ  
(15ウ)走、師云、請取羊ヲ、代、トツコモ補陀洛山ト見タ時、罪無罪トモ円通普門□テ居テ走、師云、觀ヲ、代、ミル当位テ走、師云、音ヲ、代、聞ク当位テ走、師云、証拠ヲ、代、端的ニ失スル時テ走、師云、三十二ノ相ヲ現シ羊ヲ、代、能ク識情ヲ尽セバ色々ニ出現シ種々ニ流通シテ走、師云、救イ羊ヲ、代、トツコモ円通□見タ時、極樂ナラン処ハ走ヌ、

以上八位へ、

(イ)

▽第九勢至本体ヲ、代、根本ノ一心テ走、師云、夫レハ何ントテ、代、根本ノ一心テ走、師云、夫レハ何ントテ、代、本師本仏テ走、師云、汝<sub>チ</sub>カ境界デハトコテ見タソ、代、無心無念ノ時キテ走、師云、請取羊ヲ、代、日月ノ光リノ至ラヌ処エ導イテ走、師云、導キ羊ヲ、代、良久ス、師云、其ノ心ヲ、代、端坐一念ノ時、久遠ヲ越テ走、師云、救イ羊ヲ、代、迷惑ナク悟リモ無イ処、導イテ走、師云、迷悟ナイ処ヲ、代、仏モ衆生モ隔テハ走ヌ、

(メ)

△第十阿弥陀ノ本体ヲ、代、過去久遠劫ヨリ尽未來際迄尽ヌガ無量寿仏テ走、師云、証拠ヲ、代、無心無念ノ時、此ノ境界ヲ歷<sub>ム</sub>去リモせズ來リモシ走ヌ、師云、罪人ヲ請取リ羊ヲ、代、此境界ヲ離レタ時ドッコモ唯心淨土テ走、師云、其レハ何ンタル時節ソ、代、四十八願モツキノテ何ニモナイ処テ走、師云、其レハ何トテ、代、只阿吽ノ二字迄テ、走、師云<sub>(16オ)</sub>、其証拠ヲ、代、南無阿弥陀ノ声ハカリテ走、師云、寵參ヲ、代、岩上無心風來<sub>テ</sub>陀仏滅無量罪、師云、畢竟ヲ、代、只南無阿弥陀仏迄テ走、師云、又一羊ヲ、代、<sub>ム</sub>陀仏滅無量罪、師云、畢竟ヲ、代、更參卅年、以上九位、

(ル)

▽第十一阿閦仏ノ心ヲ、代、トッコモ此一仮性テ挂テ走、師云、其レハ何トテ、代、キット良久メ、末此端的テ走、師云、請取羊ヲ、代、学合掌シテ、ア、タウトノ仏ケヤ、後生助ケテ給ワレ、師云、其レハ何トテ、代、ヤラタウトノ御声ヤ、亦、ヤラ修証ノミ声ヤトモ、師云、畢竟落居ヲ、代、只去也、師云、救イ羊ヲ、代、末此ノ境界カ本覺法身蓮心城テ走、師云、畢竟ヲ、代、法尚應捨、何況非法、

(ハ)

△第十二大日ノ全身ヲ、代、本地法身仏テ走、師云、本地法身仏ヲ云ヘ、代、至学本学、五十二位ノ仏々祖々、有情衆生、智明々タル光明ヲ学テ走、師云、請取ヲ、代、トッコモ此灵光テ照ノ走、師云、灵光ヲ、代、虛ニノ灵、空ノ妙ナリ、師云、妙処ヲ、代、父ノ一滴ノ露カ母胎エ滴ラヌ先キテ走、師云、金胎ノ両輪ラ、代、天ト始リ地ト分チ、陰ト通シ陽ト和合シテ走、師云、和合シ羊ヲ、代、天地人ノ境界カ金胎、本体テ走、師云、証拠ヲ、代、柳緑花紅<sub>ナリ</sub>、師云、救<sub>□</sub><sub>□</sub><sub>(16ウ)</sub>ヲ、代、徹底性ノ時キ沙汰ハ走ヌ、

(ハ) △第十三虚空藏ヲ、代、尽乾坤徧法界、此一仮性ニハラマレテ走、師云、虚空藏ニ徹底シ羊ヲ、代、良久メ、末此ノ當頭テ走、師云、請取羊ヲ、代、虚空々々ノ会ヲナサ<sub>ミ</sub>レバ即<sub>チ</sub>法身、々々ノ会ヲ不レ作即<sub>チ</sub>虚空テ走、師云、極重惡業ノ救イ羊ヲ、代、不会ノ凡夫ガ即<sub>チ</sub>聖人テ走、師云、虚空藏ニ相見シ羊ヲ、代、キット良久メ云、只コレ<sub>ム</sub>、師云、其ノ心ヲ、代、總<sub>ム</sub>

在レ此中円、師云、吊イ羊ヲ、代、只呑只歌ヘ、師云、其レハ何トテ、代、孝満テ走、師云、三十三年回向シ羊ヲ、代、有為空無為空畢竟空テ走、師云、畢竟落居ヲ、代、何ント説イタモ、皆アトテ走、師云、行李、代、何ソニモナイ処テ走、師云、供シ応シ羊ヲ、代、春ハ百花ト応供シ、夏ハ涼風秋月冬雪ト応供シテ走、師云、諷経シ羊ヲ、代、鴉鳴雀噪、一々妙音テ走、□□畢竟如何、代、摩訶般若波羅蜜、師云、扶ヶ羊ヲ、代、舞ウツ歌ウツサイツサレツシタ時扶テ走、師云、扶リ羊ヲ、代、何者カ有テ扶リ走ゾ、師云、畢竟十三仏ヲ一句ニ云持來レ、代、根本一仏ニシテ二仏ハ走ヌ、又師云(17オ)、猶モ子細ニ、代、畢竟幻亡テ走、以上十八位、當門徒秘参ヘ、(17ウ)